

おれは人間の魂の側につくだけで
あとは右にも左にもつかない

C・ブコウスキー

かくして
混乱のなか雨のなか薄闇のなかで
彼の姿は私たちの視野から消え失せて行ったのである

T・マン

二〇三〇年、七月十日、午後一時。

喫茶店「帰路」で、竹田金之助は苦いコーヒーを飲んでいる。
金之助の顔が怖いので、立原正男は声をかけられない。
何ともバツの悪い表情で、カウンターの中に固まっている。
そこへ、郷田狂介が入って来た。
郷田は金之助には目もくれず、立原に声をかけるべくカウンターの椅子を撰んだ
が、金之助は立ち上がって郷田の隣に座った。
「何かあたしに用かしら」
郷田は冷たい声と表情で金之助を視た。
「郷田さん。
あなたが助けたのは、本当に麻暮先生だったのですか」
声にケンがある。
「金之助さんも、しつこいわねえ。
あたしは一度言ったことは、繰返さない主義なのよ」
郷田も声を荒げた。
「それって、真実を話さないってことですか。
自分たちは、救出劇を共に演じた仲間ではないですか」
金之助も負けずに声を荒げた。
立原はますます固まった。
「大泥棒に云われたくないけど。

そうよ。

あなたが、鉄仮面を抱いて飛んだのよ。

その感触で、真実とやらが解らなかったのかしらね」

こんどは皮肉っぽい。

「あのときは夢中で、何が何だか。

もしも鉄仮面が荒野だったら、自分にも責任があるってわけですか」

金之助は、郷田のサマースーツの胸ぐらを掴みそうになってやめた。

汚れたTシャツと破れたジーパン姿の金之助がそんなことをやると、どっちが悪党か歴然としてしまうからである。

「そうは言ってないわ。

たださ、金之助さんの目を見てるとさ。

鉄仮面がもし麻暮先生でなかったとしたら、あたしを殺す感じの目」

「自分なんぞに、名探偵が殺せるわけがありません」

という金之助の言葉に、郷田の顔がすこし弛んだ。

「殺してもいいけどさ。

よく考えてごらんなさい。

あたしたちは、たしかに救出隊だったわ。

でもさ、あのとき救えたのは、ひとりだけなの。

それがたとえ荒野だったにしても、人間の命を差別なんかできないわよ」

郷田は鼻の穴をふくらませ語気を強めた。

「それはそうです。

自分が問題にしているのは、郷田さんが荒野と知っていて、麻暮先生だと偽ってきたのではないかと」

金之助は鼻づらを郷田に近づける。

「疑っているわけね。

でもさ、よく考えてごらんなさい。

もしも荒野と知ったら、みんな大騒ぎでしょ。

仮にあたしは荒野と知っていたら、絶対にみんなに教えないわ。

あたしは麻暮先生を尊敬しているけど、荒野に何の怨みもないもん。

あなただってそうじゃないの」

郷田は金之助を睨む。

「自分は、親父さんの代理として、正義の味方として、荒野退治に協力したのです。

じっさい、麻暮先生の活躍がなかったら、世界は壊滅していたかもしれないんですから」

「へん。

あたしはさあ、世界が壊滅したって平気よ」

郷田は顎を突き出した

「何という強がり。

何という居直り。

でもその強がりと居直りで、郷田さんが、とうとう真相をバラしたと考えていいんでしょうね」

「この世界に、正義とか真相なんてないのよ。

それが、一探偵としての実感ね」

金之助は何か耐えながら、しばし黙っていた。

口を開いたときは、やや爽やかな顔に変わっていた。

「どちらにしたって、後の祭りというやつですね。

自分の勘では、荒野はおそらく〈未来計画カンパニー〉に戻ったのでしょう。

また次の悪戯を考えるはず。

悪魔の悪戯をね」

「その言い方って、ひどくなあひ。

荒野大三郎はさあ、巨きな思想家なのよ。

悪魔の魅力ってさあ、天使の魅力よりもおっきいのよ」

「ちっぽけな自分には、そういうものは解りません。

自分が泥棒稼業を続けていたのは、ちっぽけな暮らしを続けたかったからです」

「まあいいわ。

それで、荒野をまた追い詰めたいわけね」

「けれども自分にとっては、麻暮先生を探すことが先決です。

指導者抜きに行動は起こせませんから。

それに、親父さんが一番心配しているのは、麻暮先生の安否です」

「それは、そうよね。

それは、わかるわ。

金之助さんにとって、麻暮のだんなは神様だもの」

郷田もだいぶ素直になっている。

「そこで、郷田さんに依頼したいのですが。

もちろん自分も命懸けで探しますが、郷田さんはプロですから。

何とかお願いできませんか」

金之助は白髪まじりの短髪頭を下げた。

郷田は予想外の展開に、複雑な表情になっている。

「あたしは高いわよ。

それに泥棒さんのお金を、戴くつもりはないからね」

その言葉に反応したのは、カウンター内の立原だった。

「その依頼料は、私がお支払いしますから、よろしく願いします」

(立原にコーヒーをタダにさせてやるわ)

と、思ってやってきた郷田は驚き、麻暮からの振込み金には手をつけていない、金欠病の金之助は感涙にむせんだ。

二〇三〇年、七月十一日、午後三時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、未来計画カンパニーのビルを見上げている。

ふたりとも、よそ行きのファッションに身を包んでいる。

カジュアル派の蝶子は、コットン素材のブラウスに黒いサブリーナパンツ。

フェミニン派の麗子は、イエローのノースリーブワンピースにクリーム色のサマーカーディガン。

蝶子はアナログ派らしくスクラップブックを、麗子はノートパソコンのタブレットとスマホを手にしていて。

「おっきい建物ねえ。

これなら、あかずに間なんか、いくつもありそう」

麗子が見上げて、写真を撮りながらつぶやいた。

「あんた、何やってるの」

蝶子が聞いた。

「インスタよ。

【探偵イトコ】のタイトルでアップするの」

「いい趣味じゃないね」

「自己防衛じゃない。

お蝶さんにつきあうのは、わたしだって命懸けよ」

「わるいなあ。

まだ夏休みじゃないのに」

蝶子はその肩に手を置いた。

「夏休みよ。

〈鎌倉PC学園〉は、七月に入ったら夏休みなのに」

「あらま」

「お蝶さんこそ、夏休みでもないのに、あんたも好きねえ。

そんなことだから、そんな容姿を持ってても、彼氏ができたことがないのね」

「あのさ。

私は毎日が夏休み。

それにさあ、いまは荒野さんが彼氏」

「そういうことですか」

「そういうこと」

「危険な彼氏ね」

「危険じゃない男なんか、男じゃない」

「あーあ、もったいない。

あたしがお蝶さんだったら、優しい男を十人くらい、手玉にとるんだけどなあ」

なんてことを言いながら、ふたりは改装されたばかりの回転ドアから入って行った。

昨日電話で、ビルの現オーナーの榊美々に面会を求めたところ、若そうな男の秘書が出て来て、

「社長は夏休みです」

と云った。

それならお宅の方に伺ってもいいかと聞いたところ、しばらくしてから、

「社長は会社に出て来るから会えます」

との答だったのだ。

無人受付で待っていた秘書に案内されて、エレベーターに乗り、社長室に入った。ふたりをソファに座るよう促してから、秘書は退出した。

榊美々は肘掛け椅子に座っていたが、すぐに立ち上がりふたりに挨拶をし、名刺も渡した。

いい薫りがしたが、香水ではなくシャンプーの匂いだった。

その態度は堂々としたものだったが、その顔（清しい小さな顔、小さな鼻、小さな口）を近くで見て、

（なんだ、子供じゃないの）

と蝶子は思った。

口にも顔にも出さなかったけれども。

「面会を許して頂き、ありがとうございます。」

わたしは社長がオーナーをしている〈鎌倉PC学園〉の優等生、こっちは従姉で東大の万年大学院生です」

まずは麗子が如才なく自己紹介をした。

「社長だなんて名目だけですから、美々と呼んでくださいな」

美々の涼しい一重瞼の眼で、上目遣いに見られると、蝶子は何だか背中が冷たく震えた。

どうしてなのか、急には判然としなかったが、

（顔は子供でも、頭は大人だと感じたからなのか。

この子が荒野大三郎の曾孫だ、と完全に認識したからなのか）

どちらかであり、どちらもである、と蝶子は思った。

「そうはいきませんわ。」

お厭でも、まだ親しい仲というわけでもありませんから、どうか社長と呼ばせてください」

（さすがは麗子だ）

と、蝶子はあらためて頼もしく感じた。

それは蝶子に、日ごろ微かに感じている不安を呼び起こした。

（私はいわゆる、〈発達障害〉なのかもしれない）

「それではご用をお聞きしましょうか。」

おおよそ想像はついてはいますけれど」

美々も同じソファの端に座った。

麗子は許可をもらって、美々の写真を撮ったあと、
「単刀直入に、お伺いします。

社長の曾祖父さま、つまり元社長の荒野大三郎氏さま、このビル内のどこかに、
おいでになるでしょうか」

手揉みをするくらいの丁重さで、麗子は聞いた。

「こちらでも率直にお答えしますが、祖父の顔もしらないのに、曾祖父だなんて、他人と同じですわ。

その他人が、このビル内のどこかにいても、関知しません」

「血というものは、あらそえないんじゃないでしょうか。

同じ血が流れている人が、近くにいたら、関知したくなくても、感知してしまう
んじゃないでしょうか」

「失礼ですが、美村さんご自分の曾祖父さまに対して、どうお思いでしょうか」

「それはその、たしかに、やはり、社長のおっしゃるとおり、他人と同じですね」
(あらら、麗子ったら降参しやがった)

蝶子は、いよいよ口を出す頃合だと身構えた。

すると、美々に先を越された。

「こちらのお姉さまは、いかがでしょう」

「いかがとは」

「もちろん、曾祖父の話ですけれど」

「他人と言えど他人ですけど、写真なんかを見ると家族のだれかに似ていて、やはり
血筋というものかと」

「あら、それはそうですわね。

なら、撤回します。

他人と同じではなく、ほぼ他人としましょう」

「それでは、そのほぼ他人さんが、このビル内にいるという確証も、いないという
確証も、ないのですね」

「お姉さんは、物解りがいいですわね。

いくら社長でも、こんなに大きなビルの隅から隅まで、把握なんかできませんわ」

「それならいかがでしょう。

私と従妹が、隅から隅まで調べさせて戴いて、詳細を社長に報告するというのは」
(相変わらず図々しい)

と麗子は思ったが、

(さすがはお蝶さん)

とも思った。

美々はほんのすこしだけ考えて、

「それは、妙案ですわね。

おふたりが、このビルを荒らすとは、決して思いませんが、秘書がうるさい人です
から、秘書同伴でよろしければ」

「もちろん、それでけっこうです」

蝶子は言うなり立ち上がった。
美々は微笑して、
「いま秘書が、美味しい紅茶を持ってきますから。
ゆっくり飲んだあとで、秘書と一緒にビル内を廻っても遅くはないでしょう」
(どっちが大人で、どっちが子供か、これじゃわからん)
蝶子は苦笑してまた座った。

秘書が入ってきた。
紅茶の香りが部屋中に漂う。
美々は、秘書に言い含めて引き上げた。
「私めは秘書。
名前も秘書。
なので秘書とお呼びください」
黒いスーツを着こなした、イケメンの秘書は云った。
美々が去ったあとは、紅茶どころではなかった。
ふたりは立ち上がり、秘書を従えて行動を開始した。

二〇三〇年、七月十一日、午後五時。

竹田金之助はスマホを手にして、郷田狂介からのメールを見ている。

【あたしの常連依頼人のひとりの情報だけどーだいぶ前に千葉の銚子で釣人が黄金仮面をかぶった人間を釣り上げたとのことー黄金仮面はまだ銚子桃十字病院に入院中とのことーあたしは仕事で行けないけどよろしくね】

金之助は、湘南の海岸をずっと取材して歩き回っていて、このときは七里が浜にいた。

(さすがに探偵はちがう)
と感心した。
昨日の激論はすっかり忘れていた。

【解りましたー自分はすぐに向かいますーあとで報告します】

そう返信して、金之助はたまたま近くにあった〈レンタカー〉に飛び込んだ。
そこで、ホンダのナナハンを借りた。
七里が浜から銚子まで、電車だと不便だし、車よりも渋滞に強いオートバイなら、面接の最終時間に間に合うと考えたのだ。

二〇三〇年、七月十一日、午後六時。

猪鹿蝶子と美村麗子は秘書とともに、いまも〈未来計画カンパニー〉のビル内を探索している。

いまは十三階にいる。

思った通り〈開かずの間〉はいくつもあった。

しかし、荒野大三郎の気配はどこにもなかった。

イケメン秘書は、親切で気さくだった。

麗子は、蝶子の思惑はそっちのけで、秘書に声をかけてばかりいた。

歳は幾つか、独身なのか、大学はどこを出たのか、生まれ故郷はどこか等々。

秘書は常に笑顔で応じていたが、曖昧な答に終始した。

そのうち麗子は、蝶子が思わず眼を瞑ってしまうことを聞いた。

「ねえ、秘書さん、榊美々社長のこと、好きでしょう」

すると秘書は笑顔を崩さず、

「それは、好きですよ。

だって、社長は私めの妹ですから」

(あらま)

蝶子はこんどは眼を見開いた。

「ということは、秘書さんも、荒野大三郎さんの曾孫なの」

「ええ。

私めの母は、榊奈々さんではないんですが」

「ということは、秘書さんは荒野さんに似ているとか」

「曾祖父の写真がないのでわかりませんが、噂によるとだいぶ似ているらしい」

「でも、松本玄信さんとか北山極齋さんとか日下典禪さんとか有名人ですから、写真くらいいっぱいあるでしょう。

手元になくとも、新聞とか週刊誌とか」

「それが、ないことはないんですが、変装してますから」

「なるほど」

このとき麗子がタブレットを操作し、

「ネットに出回ってるわよ。

変装をとった場合の三人の有名人」

蝶子が覗く。

「あらま。

変装とったら同じ顔のはずなのに、ちがうよ」

「変装とっても、変顔はとれない」

と秘書。
「なるほど。
でも、どれもいい男」
「お蝶さんの身量肩じゃないの」
「そうかなあ」
「そうよ」
そのとき、秘書が麗子の手を引張って、ひとつの開かずの間に連れ込んだ。
しかも中から鍵をかけられたから、蝶子は通路にひとりおいてけぼりとなった。

(わたし、きっと犯されるんだわ)
つと麗子は、恍惚と不安の狭間に押し込まれた。
(インスタにはアップできないけれど、記念に一応、写真撮っておこうかしら)
しかし秘書の最初のひとは、麗子の硬直した肉体を弛緩させた。
「ねえ、蝶子さんって、恋人とか、いますかねえ」
「それって、どういう意味かしら」
解っていたが一応聞いた。
「私め、おつきあいをお願いしたら、厭な思いをされますかねえ」
(わたしが厭な思いをしているわ)
とも言えないので、
「そんなことはないけど、お蝶さんは男嫌いよ」
「男嫌いって、レスビアンってことですか」
「そんな単純な話じゃないの。
頭良すぎて、若い男はみんな莫迦に見えるんじゃないかしら」
「若くなければいいんですか」
「程度のモンダイね」
「どういう程度でしょうか」
「たとえば秘書さんの曾祖父とか」
「たしかにそれは若くない」
秘書は苦笑した。
苦笑しつつ鍵を開けた。

壁に耳を当てていた蝶子は、扉が開くと素知らぬ顔で、
「変なことすると、警察を呼ぶからね」
と、秘書に云った。
秘書は恐縮して赤面した。
「もう今日はこれでおしまい。
気分が悪い」
蝶子がつぶやいたとき、秘書が、
「私め、お詫びに、とっておきの部屋に案内します」

と言って、先にとつと歩き出した。
蝶子と麗子は早足でついていった。
秘書は一番奥まで行って、
「ここです」
と扉を指さした。

蝶子が扉を軽くノックすると、
「ドウゾ、開イテイマスカラ」
と声がした。
(あの鉄仮面の声に似ている)
蝶子は武者震いした。
扉を開け、蝶子と麗子が入った。
秘書は入らなかった。

「ヤア」

と、いまは鉄仮面から黄金仮面に付け替えた、荒野大三郎が云った。

「オ嬢サン方、マタ、オ会イシマシタネ」

部屋は十メートル四方ほどあって、鉄仮面は部屋の中央の肘掛け椅子に座っていた。

長いストローとペットボトルを手にしていたから、何かを飲んでいたらしい。

その前に、小さな机があり、そこにはパソコンだけがあった。

他に調度らしきものは見当たらなかったが、壁にいくつも把手が付いているので、壁の向こうが収納庫になっているらしい。

壁の上部にはいくつか小さい窓があったが、内からも外からも見えない摺りガラスの窓だった。

蝶子は自分が思っていたほどには感動しなかった。

それは再会だったためだけではなく、麻暮を装っていたときの声調と変わらなかったからである。

その声は〈巨人〉に似合わず、優しく穏やかで紳士的であった。

蝶子は何を云うべきか、蝶子らしくもなく躊躇ったが、もってまわった言い方をしても、どうせ本心を見破られると思い、単刀直入に聞くことにした。

「あなたは、麻暮正作さんではなく、本当は荒野大三郎さんですよ」

「プフイ」

と、黄金仮面は例の奇妙な音を洩らした。

「ハイ。

先日ハ騙シテ失礼ヲシマシタ。

私ハ騙シタクハナカッタ。

シカシ、郷田サンガ、麻暮サンニ、ナリスマシテクレナイト、仲間ニ殺サレルト云ウモノデスカラ。

命ノ恩人ノ言葉ハ、第一義デス。

プフイ」

蝶子は直立不動で、

「それでは改めて、荒野さんに取材を申し込んでもよろしいですか」

「プフイ。

ソレハ、意味ガナイデショウ。

ナゼナラ、私ハ麻暮サンニ、ナリスマシテモ、自分ノ言葉デ、真実ヲ話シタノデスカラ。

ソシテアレガ、イマ私ガ、話セル総テデスモノ」

「それでも、あのときよりもずいぶんとお元気のご様子。

元気があると、まだ他に話したいことが出てくるのじゃないかしら」

「プフイ。

コノ〈特製プロテイン〉ノオカゲデス。

郷田サンハ、〈特製スープ〉作りノ名人デスガ、脳味噌以外ハゼンブ、造リモノノ、コノ肉体エスカラ。

コウシタ、人工的ナモノガ、合ウノデショウ」

鉄仮面は、荒野は胸の前で手を合わせた。

「その飲み物は、あなたの曾孫の美々さんが、こしらえたものでしょうか」

「残念ナガラ、美々トノ接触ハ、一切アリマセン。

コレハ、私ノ忠実ナ部下デアル、川上宙門ト木下太郎ガ、作ッテクレタモノナノデス」

川上と木下の名前を言うとき、荒野は慈愛と云ってもいい声を出した。

「でも、川上さんも木下さんも、玄治さんに殺されたのではないの」

荒野の声調が変わり、

「プフイ。

アノ二人ガ、ヒ首ナンカデ、死ヌワケガアリマセン。

ナゼナラ常ニ、特殊ナ防御服ヲ、身ニツケテイルノデスカラ。

ソレハ、刃物デ刺サレルト、刃物デ刺サレタ風ニ、血ガ飛ビ散リ、銃デ撃タレルト、銃デ撃タレタ風ニ、血ガ吹き飛ブノデス。

ツイデニ、ソノ瞬間、一時的ニ呼吸モ脈モ止マリマス。

ソウ、一時的ニ」

あまり驚かない蝶子だが、これには驚く他はなかった。

「まあ。

でも玄治さんは、殺人者にならないでよかった」

「プフイ。

レッキトシタ殺人者デス。

殺シテイルンデス。

殺サレタガ、川上ト木下ハ自ラノ〈ノウハウ〉デ生き返ッタ。

ダイタイ玄治トイウ人ハ、イマハ麻暮サンノ手下ニ、オサマッテイマスガ、以前ハ名ウテノ、殺シ屋デスモノ」

「そうでしたか。

どちらにしても、川上さんと木下さんがご存命であるからには、また何か計画されているんですね」

「オ嬢サンハ、私ニ興味ガ、オアリノヨウデスガ、私ノコトヲ、誤解シテヤシマセンカ」

荒野が身を乗り出したので、蝶子は思わず一步後ろに下がった。

「誤解はしてないつもり。

それに、お嬢さんはやめてもらえませんか。

私は猪鹿蝶子と云います」

断固として云った。

「ソレハ立派ナ、オ名前デ。

ソレデハ蝶子サン、私ハアナタガ考エテイルヨウナ、極悪人デハアリマセン」

「極悪人だなんて。

そんなふうにかけていたら、わざわざやってはきません」

「ソレニ私ハ、イツダッテ、計画ナゾシナイノデス。

自然、ソウ自然ニマカセルノミ。

チナミニ、蝶子サンハ、私ガドンナ計画ヲシテイルト」

(計画しない人が、〈未来計画カンパニー〉なんて社名を作らない)

蝶子はわざと考えるふりをしたが、しばし前から考えていたことを口にする。

「かつて〈自殺請負所〉を作った人ですから。

いまの時代なら、さしずめ〈自殺サイト〉でも立ち上げるかと」

荒野もわざと考えるふりをしてから、

「私ハ〈アナログ人間〉デスカラ。

川上ト木下ガ、ソナコトヲ考エルカモシレマセンガ、ソウイウコトハ、私ノ本意デハアリマセン。

〈自殺請負所〉ノ時代ハ、アクマデモ川上所長ト自殺願望者トノ、〈直接的コミュニケ〉ガ基本。

私ハ、〈ネット類〉ヲヨク知リマセンガ、〈自殺サイト〉ナゾトイウモノハ、イワバ〈間接的コミュニケ〉デショウ。

X線ノ検査ダッテ、直接撮影ナラ解ル病巣モ、間接撮影ダト解ラナイノデハ。

シカモイマハ、サイトカラ、ツイッター、ライン、ト移行シテイルノデハ」

(うまい理屈だ)

と蝶子は思ったが、納得はしなかった。

「私も世代的には珍しいアナログ人間ですが、アナログ人間はデスクの上にパソコンは置かないのでは」

「プフイ。

コレハ、確カニパソコン。

デモ私ハ、パソコントシテ、使ッテイルワケデハアリマセン。

川上ト木下ガ、一方的ニ連絡ヲクレル、テレビ電話。

ジッサイ、コノ手デハ、キーボードヲ打テマセン」

荒野は、野球のグローブに似た手袋を蝶子の前にかざした。

(そんなものははずせばいい)

と蝶子は思ったが、それは云わず、〈巨人〉と云うものは、表層的には優しく穏やかで紳士的なものなんだろう、と思いつつ、

「きっと荒野さんは正直に云っているのしょうから、私も正直に云います。

私が荒野さんに興味を持っているのは、もちろん極悪人だと考えているからではなく、あなたの脳味噌の〈闇〉と〈病み〉。

それらが、現代社会の〈闇〉と〈病み〉に通じるからなのです」

この言葉に、荒野は黙り込んだ。

荒野の沈黙は長く、いままで何も云わなかった麗子が、たまりかねて口を開く。

「長居をしすぎたようですわね。

荒野さんは病み上がりだし。

お蝶さん、今日はこれくらいにしましょうよ。

荒野さんの居場所も分かったのだし、またお邪魔してお話したらいいわ」

蝶子は瞬時、渋い表情を作ったが、

「麗子の云うとおりね。

では、荒野さん、また伺います。

どうか、お元気で」

丁重に一礼して、踵を返した。

二〇三〇年、七月十一日、午後八時半。

竹田金之助は、銚子桃十字病院にいる。

夜間受付で面会の手続きを済ませ、黄金仮面（麻暮正作）が入院しているはずの病室（個室）へ向かう。

扉をノックするが返事はない。

金之助は泥棒稼業で鍛えた、抜き足差し足忍び足で病室に入った。

「麻暮先生、金之助です」

囁く声で云うと、

「ああ、金之助さんですか」

くぐもった声だったが、それは麻暮の声ではないとすぐに解った。

「もしかして、玄さんですか」

ベッドを覆っているカーテンが開かれ、黄金仮面が顔を出した。

仮面の奥の眼が笑っている。

「実はそうなんです。

麻暮先生になりすまして、ここにいます」

「それにしても、よく助かりましたねえ」
金之助は玄治の手を握って、再会を喜んだ。
玄治は黄金仮面をはずしながら、
「いやはや、これは息苦しい。
金之助さんが来てくれたので、ようやくはずすことができます」
「しかしどうして黄金仮面を」
「担当医が毎日聞く質問ですね。
何があっても、この仮面をはずさないから、病院に不審がられて」
「当たり前でしょう」
「そうなんだが、これをかぶっている間は、私が狙われることはあっても、麻暮先生は無事だと思って」
「麻暮先生が、一体だれに狙われるんです」
信じられないので聞いた。
「川上宙門と木下太郎ですよ」
金之助は声を落とし、
「だって、あのふたりは、玄さんに殺害されたのでは」
ベッドの上であぐらをかいた玄治は、腕を組んで、
「どうもそれが怪しい。
というのは私が手にかけてとき、ふたりとも抵抗をまったくしなかったんです。
観念して抵抗しなかったのではなく、死んだふりをしたかったのではないかと。
いいや、そういうことは解らんのですが、何人も殺してきた私の実感が、あのふたりは死んではいないと囁くんです」
「それが真実なら、厄介ですねえ」
「数日前、医師のふりした奴と、看護師のふりした奴に命を狙われました。
連中は、私のような子者ではなく、麻暮先生の命を狙ったのです。
返り討ちにしましたが、瀕死の状態に逃げたから、タダものではない。
川上と木下に依頼された殺し屋にちがいません」
「あのふたりがすでに動き出しているということは、ますます厄介ですねえ。
それで、麻暮先生はいまどこに」
「云うときが来たら教える、ということでご勘弁を。
ただ先生は以前と変わりがありません」
「それはよかった。
でも、よく助かりましたね」
「私は殺し屋である以前から、海の男です。
海難から身を守る術は、いくつも持っています」
「その術で、先生を救ったのですね」
「とんでもない。
あの人は、不死身ですよ。
私が出る幕なんかありません」

巨大コードを裂いて、私を導いてくれたのは先生です。
先生はあそこからいつでも脱出できた。
それを居座ったのは荒野と共に居て、荒野という存在を感じたかったからに他なりません。
生涯のライバルならではの感情で、私らには解りませんがねえ。
いずれにしてもあの件で、だいぶ放射能を浴びたら、どういうわけか更に強靱になった気がします」
「それは頼もしい。
やっぱり郷田さんが助けたのは、先生ではなく荒野だったんですね」
金之助の言葉に、玄治は声をあげた。
「やはり、荒野はまだ生きていますか。
そうでなければ、川上も木下も動かないでしょう。
麻暮先生の予見はいつも正しい。
荒野は、未来計画カンパニーに身を潜めているにちがいありません」
「先日まで、郷田さん宅の別館にいました。
鉄仮面をかぶって」
「すると、郷田さんは裏切り者か」
玄治の目が光った。
ここは穏便にすますべきと、金之助は考え、
「郷田さんには郷田さんの、理屈があるようで。
裏切り者の汚名は、かぶせないことにしています。
それに、調査をしてここを教えてくれたのは、郷田さんですから」
「まあ、金之助さんがそう云うなら。
さあ、一緒に帰りましょう。
帰って、あれこれ対策を練りましょう。
何しろ荒野には莫大な資産があるから、また何かしでかすにちがいありません。
山風署長は体調を崩しているし、郷田さんがそういう状態なら、麻暮先生を手助けできるのは、金之助さんとこの玄治のふたりだけです。
あちらは気鋭の科学者と医学者、こちらは引退した大泥棒と殺し屋。
いい勝負になるでしょう」
「退院できるのですか」
「とっくに退院できる身体。
婦長にも、早く退院してくれとせつつかれているんです。
魚のにおいと潮のかおりがする、この町が大好きだから、決して退院はしないと、私は言い張ってきたのですよ」

二〇三〇年、七月十二日、午前十一時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、〈帰路〉で朝昼兼用の軽食を採っている。
立原特製の野菜サンドに、スクランブルエッグとポタージュスープ。
麗子はダイエット中なので、エッグとスープは蝶子が二人分。

「お蝶さんは、いつもよく食べるわね。

それでスタイルがちっとも変わらないのだから、ずるいわ」

麗子は恨めしげに云った。

「あんたは本を読まないから太るのよ」

「ダイエットにいい本ってあるの」

「莫迦ねえ。

難しい本をいつも読んでいるとさ、エネルギーを使うから太るヒマはないってこと」

「なんだつまらない。

つまらない本を読むくらいなら、太ったほうがましよ」

「そういう根性だから、荒野大三郎の実存的魅力が理解できないのさ」

「実存的魅力より、イケメンの魅力のほうがいいなあ」

麗子は、秘書の容姿を思い出していた。

「あの秘書はやめときなさい。

あれは根源的悪ではなくて、表層的悪だから」

「どちらがうのかしら」

「つまり、〈悪魔のような素敵な奴〉ってこと。

荒野は〈悪魔だから素敵な奴〉なの」

蝶子は断固たる口ぶりで云った。

「わかりませーん。

お蝶さんとちがって、わたしは凡人だからわかりませーん」

麗子は口をとんがらせた。

「私だって凡人なの。

凡人だから、ああいう天才に近寄りたいの」

「凡人は凡人仲間と、凡人ごっこしてりゃいいんじゃないの」

と減らず口をたたいた後で、ふと思いついた麗子は、

「わたしが不思議なのは、どうしてお蝶さんが、正義の天才、麻暮正作でなくて、悪の天才、荒野大三郎なのかってことよね」

「そうよねえ」

と少し考える仕草をしてから、微笑をたたえた蝶子は、

「結果論だけど、麻暮さんは世界の正義をふりかざして戦ってきたの。

結果論だけど、荒野さんは世界の悪を一身に引受けて戦っているの。

もしかすると、おそらく、たぶん、いえ、きっと」

「よくわかりませーん。

お蝶さんの好きなドストエフスキーとかニーチェとか読めば、解るかもしれない

けど。

そこまでして解りたくない、そんな気分なの」

麗子はおそらくわざと、憂鬱な表情を作った。

「あんたのそういう顔は可愛いな。

だからあんたはあんたでいいの」

「荒野さんって、歴史上の人物で云うと、だれに似てるのかしら。

ナポレオン、それともヒットラー」

蝶子は間髪をいれず、

「肉体は勝海舟、精神は西郷隆盛かな」

「わかりましたー。

わからないけどわかりましたー。

それで、これからどうするの。

また荒野さんに会いに行くのかしら」

こんどは本当に憂鬱そうだった。

(秘書が自分にではなく、麗子に興味を持ってくれたのだったら、こんな顔はしないだろう)

蝶子はそう思ったが、そんなことは云えないから、

「あんた次第。

だって、麗子と一緒にだから、私は活動できるんだから。

一緒にでなければ、私は一個の哀れな自閉症患者」

これはいつもの殺し文句だった。

「わかりましたー。

お蝶さんのためなら、手となり、足となり、口となり、性器にもなりましょう。

頭にだけはなれないけれども」

そう云ったが、麗子はまだ憂鬱そう。

「ううむ。

あんたは私の頭だな。

私の世間での頭。

麗子の頭がなければ、私は一個の哀れな知的障害者」

この殺し文句は、初めての台詞だった。

麗子の愁眉がようやく開いた。

麗子は調子に乗って、

「この情報氾濫時代の処世術はね」

「そんなものあるのかい」

「ひとまず、信じないこと」

蝶子は黙って首肯した。

その後は雑談をし、別れる真際に、蝶子は麗子にこう頼んだ。

「荒野さんとの再面会は、三日後の午後一時。

昨日は遅い時間に伺って失礼しましたと前置きして、美々さんではなく、直接秘書さんに連絡をとって頂戴。

その間私は、大学院に籠って、いままでの私なりの考えと感想をまとめることにする。

陽羅義光さんは『巨人荒野』と云うノンフィクションノベル大作を書き続けているけど、私は、同じ『巨人荒野』と云うタイトルで、ライフワーク〈荒野大三郎論〉を書くつもり」

二〇三〇年、七月十二日、午後三時。

竹田金之助と玄治は、「帰路」で相談をしている。

そろそろ結論を出す頃合になった。

玄治が金之助の眼を見ながら云う。

「それでは、明日のこの時間に、ここで。

しばしミーティングをしてから出発しましょう」

「了解です。

車は自分が借りてきますから、玄さんは身ひとつで」

金之助の表情はかなり緊張している。

玄治は微笑して、

「そんなに硬くなって、車の運転は大丈夫ですか」

「そりゃ、麻暮先生に会えるのですから、親父さんの金助の分まで興奮してます。

自動車の運転は久しぶりなので、安全機能付きの電気自動車を借りてきますから、心配は要りません」

「金助さんにはすでに報告済みですか」

「親父さんったら、いまにでも未来コスモス院を飛び出す勢いで。

いやはや。

親父さんの涙で、自分のシャツはまだ濡れていますよ」

「それはよかった。

金助さんの麻暮先生への思い入れは、私らにも及びがつきませんからねえ」

玄治は呆れた声を出したが、じつは感心していたのだ。

「ところで、これは郷田さんの話ですがね。

荒野を追い求めている、若い女性がおるそうで」

玄治はまた呆れた声を出して、

「はあ。

それは、復讐のためですか。

それとも怖いもの見たさ」

「それが、東大の大学院生とかで、研究課題なんじゃないか。

郷田さんはそれ以上の何か、要するに英雄願望らしきものを感知したと云うのですが」

玄治は溜息をついて、

「世の中、変わりましたねえ。

私ら老人には、とても理解できません」

「いえいえ。

ゴルゴ13もビックリの、元殺し屋が何をおっしゃる。

玄さんの正体を知ったら、荒野をすっぽかして、こっちに来てしまいますよ」

玄治はまた溜息をついて、

「金之助さん、すまないが、もっと声を落として。

私は堅気の釣具屋に過ぎませんよ」

「そうでしたね。

ただ自分が危惧しているのは、その若い女性が、自分らの今後の活動に、妙な関わり方をしてくるのではと」

玄治は苦笑して、

「いざとなったら、天下の大泥棒に、彼女の魂を盗んでもらうしかありませんな」

「いやはや。

自分も情けないことに、女性にと云うより女体に飢えていますから、盗めるものなら盗みたいものですが」

「金之助さんは二枚目だから、いけますよ。

決めた。

よし、いざとなったら、それですね」

「勝手に決められても」

と云いながらも、金之助は満更でもない表情だった。

二〇三〇年、七月十三日、午後五時。

竹田金之助は玄治を横に乗せて、電気自動車を運転している。

「三浦半島はまだでしょうか」

金之助が前を向いたまま聞いた。

「もう半島ですよ。

観音崎へは、安全運転で、あと三十分」

玄治は金之助の横顔を視ながら答えた。

「たしかに安全運転しないと」

朝からの小雨はあがっていたので、ワイパーは止めたが、霧が深い。

「いまは霧の季節ですか」

金之助の素朴な問いに、玄治は深呼吸をしてから、

「春立つのが霞、秋立つのが霧。
夏立つのは、聞いたことがありません。
しかもこうした広域のものは、霧は霧でも、靄と云うんです」
「どうりでモヤモヤしますね」
「座布団一枚。
これは、麻暮先生の念力ですね」
「念力で霧や靄を」
「先生ならやりますね。
大昔から、姿を隠すのは霧か靄か煙、って相場が決まっているんですから。
それに一時的にでも、観光客を追っ払える。
念力と云うより、忍術ですかね」
「霧隠才蔵ですか」
「靄靄佐助かな」
「まだですか」
「その先です」

霧がますます濃くなった。
ヘッドライトを点けていても、五メートル先が見えなくなった。
金之助は車を徐行させつつ、
「もういけませんね。
危険区域に入りました。
車をいったん止めてもいいですか」
「いいものにも。
着きましたから、ここで降りましょう」
「こんな霧で、よく解りますね」
「ふたりだけのGPS。
半世紀前はアナログ人間相手の闘いでしたが、いまはデジタル人間相手の闘い。
先生もあれこれ、苦労も勉強もしていますよ」
車が停まると、玄治は先に降りて、濃い霧のなかを歩いて行った。
金之助は後に従ったが、何も見えない。
森も海も浜も、何も見えない。
かすかに潮の香りと、かすかに波の音がする。
玄治の姿を見失いそうになったので、金之助は早足になった。
ふたりが三分ほど歩くと、見上げた先に灯台の灯りが灰かに見えた。
つと玄治が立ち止まり、つられて金之助も立ち止まった。
過呼吸症の人さながらに、玄治が呼吸を繰り返し、つられて金之助も呼吸を繰り返した。
玄治が息を止め、耳をすませたので、つられて金之助も息を止め、耳をすませた。
不気味な静けさのなかで、

「先生、麻暮先生」

玄治は濃い霧の向こうに呼びかけた。

まるでそこに麻暮正作が存在するのを、確信している口調で。

金之助が、眼を凝らすと、濃い霧のなかに黒い鉄仮面だけが浮かび上がる。

「やあ、金之助さん、お久しぶり」

以前よりも明るい声だ。

「先生、お元気で何よりです」

金之助は金助の分まで泣きたくなった。

「玄さんが気を使ってくれるからね」

麻暮は灰色のマントを身につけているから、鉄仮面だけが宙に揺れている感じに見える。

「親父さんがどれほど喜ぶことやら」

金之助は泣き笑いの顔をした。

そして金助のために、スマホで麻暮を撮った。

麻暮は拒まずに、金助のためにポーズすらとった。

「金助さんに会いたい、まだやらねばならないことがある」

「解っています、先生。」

自分たちはそのために来たのです。

指示を出してください」

金之助は力強く云った。

麻暮は穏やかな声で、

「その先生という云い方なんですけどね。」

世の中、先生と呼ばれている者に、ろくな人間はいませんからねえ。

ケケケ。

どうにも気になって」

「それは失礼しました、先生」

やれやれと云うふう、麻暮は鉄仮面の頬を搔いてから、

「無闇に動くのは、ボクたちの本意ではない。」

荒野が、いや荒野の指令を受けた、川上と木下が、いつ、どう動くかで、ボクたちの活動がきまる。

それでもそれは遠い話ではない。

荒野が未来計画カンパニーに戻ったからね。

ケケケ。

玄さんも金之助さんも、ボクと一緒にこの観音崎に留まってくれませんか。

荒野の暗躍の地は、湘南ではなく、今度は此処よ。

要するに、例の長大なコードの根元が、観音崎の海底の巨大な珊瑚礁に引っ掛かっている。

ボクたちの知識では、珊瑚礁と云ったら沖縄だろうが、此処の珊瑚礁は人工的なものだ。

これからの調査になるが、その巨大な珊瑚礁の中に、もしかすると海底都市が造られつつあるのかもしれない」

「そいつはまあ、えらいことで」

玄治が呆然とすると、金之助は、

「まったく、自分の想像を絶する話ですね」

驚嘆の声をあげた。

「ボクは荒野とは長いつきあいだから、君たちみたいに呆然も驚嘆もしないが、何よりも荒野一味の妄想と暴走を止めるのが、ボクたちの使命だ。

もしも世界がボクたちの行為を、蛮勇、愚行と呼んでも、ボクたちはボクたちの正義を信じよう」

麻暮はマントを翻し、ふたりに接近した。

二〇三〇年、七月十五日、午後一時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、未来計画カンパニーのビルのエレベーターに乗っている。十三階の荒野大三郎の部屋に直接行くことを許可されていたのだ。

今日は朝から日射しが強かった。

蝶子は黄色いTシャツに青いショートパンツ、麗子はピンクの半袖ワンピース。

蝶子は相変わらずスクラップブックを、麗子は相変わらずノートパソコンのタブレットとスマホを手にしていた。

「なんか、初めてのときより緊張するわね」

麗子がつぶやくと、蝶子は頷いた。

「それにしても、よくすんなりOKが出たね」

「秘書さんのお話では、荒野さんご自身も、お蝶さんに話があるんですって。

なんか怪しいわね」

「怪しい人に怪しいと云っても意味ない。

私に話なんて、ちょっと嬉しくなるな」

「お蝶さんはこれだから」

「これだから何さ」

「わたしも苦勞が絶えないってこと」

「あんたの苦勞が、私の力。

あんただってあんがい、面白がっているんじゃないの」

「ばれたか」

荒野の部屋の前に着いた。

蝶子が扉を軽くノックすると、

「ドウゾ、開イテイマスカラ」

すぐに荒野の声がした。
蝶子と麗子は遠慮なく入った。
先日の御礼を云ってから蝶子は、
「さっそくですが私にお話があると」
「話トイウヨリモ、御願イデスネ」
荒野の声は、先日よりもずっと元気だった。
力強くもあつた。
そのことに蝶子は内心喜んだ。
黄金仮面も歴然と新しくなっていた。
眩しいくらいである。
「私なんかに御願いですか」
「ナンカナンテ、云ウモノデハアリマセンヨ。
猪鹿サンガ凡人デナイコトハ、解ッテイマス」
「プフイ」
(これは、警戒しないと)
と蝶子は思った。
お世辞を云われたときの習慣だ。
それから、
(ひとまず、信じないこと)
これは麗子に云われた言葉。
「私なんかでできることなら何なりと」
「マタ、ナンカデスカ。
マア口癖ト云ウコトデショウネ。
御願イハ、凶々シイコトニ、三ツアリマス」
「まあ、三つも」
と声をあげたのは麗子のほうだ。
「ハイ、三ツモ、デス。
一ツハ、ソウ難シクアリマセン。
私ハ以前カラ、寄付ヲシタイト、考エテキタノデスガ、ドコニ寄付シタライイノ
カ、ナカナカ思イツカナイノデス。
ソレデ、猪鹿サンニ、寄付スル先ヲ、決メテイタダコウト」
「お言葉ですが、まず寄付したい先があつて、それから寄付を考えるのではないで
しょうか。
どこでもいいと云うのは、税金対策みたいで厭ですわ」
「ソレハ、鶏ガ先カ、卵ガ先カ、ト云ウコトデ、理解シテモラエマセンカ。
ソレニ本当ハ、猪鹿サン御本人ニ、寄付ヲシタイノデス。
デモ寄付ヲ、甘ンジテ受取ル人デハナイ。
ソレナラバ、アナタノ指定スル所、関係スル所ニ、寄付ヲシタイト」
蝶子は眉に唾をつけたい気持だった。

だが、疑問は疑問で残して、
「単刀直入に、金額はおいくらですか」

荒野は即座に、

「百億円。

私ノホボ全財産デス」

「ひゃ、ひゃ、ひゃくおく」

と声をあげたのは麗子のほうだ。

蝶子はこの件を、まだ信用していなかった。

それに、『死んだる団』『巨人荒野』からの情報と蝶子の勘では、百億円は荒野の全財産のほんの一部と考えたのだ。

「プフイ。

猪鹿サンモ御存知ノトオリ、私ガ大金ヲ持ッテイルト、マタ途方モナイコトヲ、考エテシマイマスカラ。

会社モ、曾孫ガ無事ニ、経営シテクレテイマスシ、扶養家族モアリマセンシ、私ハ賭事モ遊興モヤリマセン」

「それが理由ですか」

蝶子は一応聞いた。

「ソレト、私ノ愚行ノセイデ、亡クナッタ方ガ沢山イマス。

罪滅ボシモアリマスカネエ。

プフイ」

「愚行、愚行、愚行。

いまの荒野さんは、かつての行為を愚行と思っているのですか」

「イマ、デハアリマセン。

昔カラ、愚行ト思ッテイマシタ。

ソノ愚行ヲ、ヤラズニイラレナイホド、弱イ人間ナノデス」

荒野の声はここで弱々しくなった。

(なかなかの役者だわ)

と蝶子は思ったが、そう思うことは、信用していないと云うことに等しかった。

「失礼ですが、思いつきか、気まぐれとしか思われませんか。

でなければ、もっと失礼ですが、何か魂胆があるとしか思われませんか。

私本人に寄付をしたい、あるいは私の指定する所、関係する所に寄付をしたい。

そのことと、荒野さん曰く〈かつての愚行な行為の贖罪〉とは結びつきませんもの」

蝶子は荒野の言葉の矛盾を突いて、黄金仮面の奥の両眼を凝視していた。

「私ハ、ト云ウカ、人間ト云ウ存在ハ、矛盾ダラケノモノ。

デスカラ、私ノ言葉ニ矛盾ガアッテモ、何ラ不思議デモ、如何ワシクモアリマセン」

先程とは打って変わった荒野の堂々たる声調に、蝶子はいささか引いた。

「寄付に関しては、いま急にはいい所が思い当たりません。

お時間をいただくとして、二つ目の御願いを聞かせてもらえませんか」
「ソウデショウネ、ソウデショウトモ。
ソレデハ二ツ目デスガ、猪鹿サンノ脳味噌ヲ、貸シテクレマセンカ。
ナンテ云ウト、驚クデショウガ、実ハイマ頭ヲ使ウコトヲヤッテイマシテ。
A I レベルノ頭脳ガ必要デス。
シカシドウシテモ、最後ノ詰メガ甘イ。
ソコデ、アナタノ脳味噌ヲ、一時的ニ、私ノ脳味噌ノ中ニ、埋メ込ミタイノデス」
「の、の、のうみそ」
と声をあげたのは麗子のほうだ。
蝶子は落ち着いていた。
荒野の御願いとやらが、簡単なものでないことは、初めから解っていた。
「私ニハ、有能ナ科学者ト、実力アル医学者ガ、ツイテイマスカラ、危険ト云ウコトハ、絶対ニアリマセン。
内視鏡手術レベルノモノハ、必要デスガ、後遺症モ傷口モ、全クナイトノコトデス」
「荒野さんは、私の脳味噌をかいかぶっていらっしゃる。
東大に入学できたのは、運がよかったからで、大学院でも遊んでばかりいて、仲間に莫迦にされているくらいです」
「プフイ。
猪鹿サンハ、私ノ眼ニ、狂イガアルト。
プフイ。
アナタノ個人情報ハ、全部調査済ミデス。
血液型、健康状態、運動神経、そしてIQ。
五歳デ、中学生ト同ジ学力。
小学校高学年ノ時ハ、大学ノ受験問題ヲ総テ解ク。
中学、高校ハ、バドミントン、テニス、卓球デ、日本一。
御両親ハ離婚サレタケレド、イズレモ東大教授。
祖父母ハ」
「もうやめてください」
荒野の言葉を遮った蝶子は、荒野を睨み付けながら、
「そんなことにどんな意味があるのでしょうか」
「プフイ。
DNAニ間違イハナイ、トイウ意味デスヨ」
「そんな根拠で私の脳味噌を」
「ハイ。
充分ナ根拠ト、ソレ以上ニ、私ノ第六感デス」
「第六感、ですか」
「プフイ。
アナタガ、郷田サンノ別館ニ来タ時ニ、感ジルモノガアッタノデス。」

猪鹿サンハ、第六感ヲ信ジマセンカ」
（それは、信じる）
というのが本心だが、蝶子はそうは云えずに、
「第六感なんか、当てになりません。
脳味噌を求める人が、第六感だなんて」
荒野は苦笑し、
「プフイ。
一本トラレマシタネ」
「それもお返事は後回しにさせて戴いて、三つ目は何でしょう」
（きっと三つ目はとんでもないことだ）
と蝶子は思ったが、顔には表わさなかった。
「三ツ目ハ云イニクイ、云イニクイノデス。
シカシ、イマ云ワナイト、私ニハ明日ガアリマセンカラ」
「どうぞ、聞くだけなら何でもお聞きします」
「ソレデハ。
猪鹿サンガ、怒ラナイコトヲ、祈リマス。
私ト結婚シテモラエマセンカ」
「け、け、けっこん」
と声をあげたのは麗子のほうだ。
「話が逆ですね」
蝶子は冷淡な声で云った。
「逆トハ」
「三つの御願い、と云うことですが、一つ目が求婚じゃないかしら。
そうして、それを受けてくれるなら、結納金百億円。
伴侶になれば、一身同体ですから、性器のみならず脳味噌も合体できるでしょう」
〈もしかすると、荒野さんにとって私は、飛んで火に入る夏の虫だったのかも〉
たとえそうだとしたとしても、夏の虫になってもいい、と云う気持が湧いてくるのを、
蝶子は必死に抑えていた。
「サスガニ、痛イ所ヲ突イテキマスネ。
ケレドモ、逆モマタ真ナリ。
猪鹿サンニ対スル、私ノ〈三顧ノ礼〉ト、考エテモラエマセンカ」
「解りました。
荒野さんがそうおっしゃるなら、そういうことで。
いずれにしても、時間を戴けませんか」
「デハーヶ月」
「いいえ、三日間でけっこうです。
時間をかければ、ご名答が導き出されるわけでもありませんから。
ただ、あまり期待をされても困りますけど」
「了解デス」

麗子が目を見開いて、
「お蝶さん、一ヶ月にきなさいな。
人生の大問題じゃないの」
と云っても、大丈夫よと云うふうに、蝶子は軽く首を振った。

二〇三〇年、七月十五日、午後四時。

竹田金之助と玄治は、麻暮正作の隠れ家にいる。
観音崎の海岸から一キロほど離れた所の、鬱蒼たる竹藪に囲まれた、古くみすぼらしい一軒家。

合掌造りではないが、いまどき珍しい藁葺き屋根。
台所と土間と、六畳の板の間がふたつ。
手前の板の間に簡素な箆筒がひとつ。
奥の板の間には破れ襖の押入れがひとつ。
小さな床の間に、古い掛軸と古い花瓶が飾られている。
掛軸は、西郷隆盛の書だと云う。
花瓶に、いまは可憐な水仙が十四、五本。
テレビもパソコンもない。
朝から夜まで周りに人気はない。
障子を開け放っていても、車の音は聞こえず、微かに潮騒の音が聞こえるだけ。
たまに蝉の唸り声が聞こえるが、合唱ではない。
竹藪の所為で日は当たらず、夏でも風がどこかひんやりしている。

麻暮は今日も朝から、アクアラングと弁当を抱えて海に出かけた。
観音崎の海底を探っているのだ。
「自分たちも行きます」
と金之助は当然云ったが、麻暮に、こう諭されている。
「ありがたいが、君たちは命の洗濯、あるいは英気を養っててもらいたいだよ。
いずれ遠からず、命懸けのことをやらしてもらわねばならないからね。
それに三人で行動していたら、目立っていけない。
こういうことは、秘密裏にやるものだからね。
ケケケ」

金之助と玄治は手前の板の間で、退屈そうに焼酎（〈黒ダルマ〉と云う最近出た一番安いもの）を飲んでいる。
麻暮が雇ったお兼ばあさんが、あれこれやってくれている。
いまは台所に居るが、それまでは庭の草むしりをしたり、庭にある便所の掃除を

したりしていた。

(目が不自由なので、鉄仮面を怖がらないのだろう)

金之助も玄治もそう思っている。

割烹着を着たお兼ばあさんが、酒の肴を作って運んできた。

「お口に合わんかもしれんがのう」

鮑を甘辛く煮付けたものと、海胆と水雲の和え物と、鮪と烏賊の酢漬け。

海の男の玄治は淡々と口に運んだが、刑務所生活が長い金之助は、

「旨い、旨い」

を連発した。

お兼ばあさんは歯のない口を開けて、嬉しそうに笑い、

「金之助さんは二枚目じゃろな」

見えない目を近づけて言った。

「当たっているから憎らしい」

と玄治は云って大笑した。

金之助も苦笑して、玄治に焼酎を注いだ。

そのとき麻暮が帰って来た。

「ケッケ。

賑やかにやっていますね。

ボクも仲間に入れてもらおうかな」

荷物を置いて、玄治と金之助の間に坐った。

坐るなり、茶碗を掴んだ。

「あれっ、先生は飲めましたっけ」

玄治が云って焼酎を注ぐと、

「ケッケ。

ボクはアルコールアレルギーだったのよ。

それが突然治った。

消える寸前に炎は明るくなる、というやつかなあ」

玄治はこれも放射能の影響かと思い、反動が怖いと考えた。

(もしも麻暮正作がこの世界からいなくなったなら)

と考えると、慄然とした。

(この世界は消滅し、それ以前にこの玄治の生きる意味も消滅する)

二〇三〇年、七月十五日、午後五時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、「帰路」にいる。

立原がクリームソーダをふたつ運んで来た。

「ああ、気疲れしたよー。

「気疲れには、これにかぎるわ」

「私もだな。」

「やっぱり、これにかぎるな」

蝶子はソーダを一気飲みしてから、クリームは後で。

麗子はクリームをつぶし、グリーンソーダと混ぜた。

「お蝶さんが、気疲れだなんて。」

「まったく、荒野さんの前で、女帝の雰囲気だったわ」

麗子は呆れ声だ。

「荒野さんと結婚したら、女帝になれるかな」

蝶子は惚け声だ。

「ホントに三日間で答を出すつもりなの」

「だって、答はもう出ているもの」

「ゲゲゲ」

「それって、麻暮さんの真似かい」

「ゲゲゲの鬼太郎」

「鬼太郎ってだれさ」

「お蝶さんは、ゲゲゲの鬼太郎も知らないの」

麗子はまた呆れ声だ。

「自慢じゃないけど、世間知らずなもの」

「世間知らずに結婚は無理ねえ」

「その無理な結婚をするの」

蝶子は平然と云ってのけた。

「ゲゲゲ」

口に含んでいたアイスクリームを、麗子は吐き出しそうになった。

「その不気味な擬声語、やめてくれないか」

「お蝶さん、気はたしかなの。」

「荒野さんは、ゲゲゲの鬼太郎の百億倍不気味よ」

麗子は口をとんがらせる。

「そういうことは結婚の妨げにはならないよ」

「荒野さんと結婚してどうする気なの」

「まずは健康診断、身体検査。」

「それから同衾かな」

「これも平然と云ってのけた。」

「ドウキンってなに。」

「金と銅があって銀がない」

「セックスのことよ。」

「でもきっとバーチャルセックスだね。」

「脳味噌合体はその後でゆっくり」

「また平然と云ってのけた。」

「寄附はどうなのよ。
東大大学院の研究所に寄附してもらうつもりなの」
「あそこは国立だから意味がないかな。
寄附は放射能被害者のために」
「荒野さんって、放射能で世界を壊滅しようとしたんじゃないの。
それは、罪滅ぼしと云うことになるのかしら」
「私の皮肉かな」
「つまり、皮肉的結婚と云うことかしら」
「いいえ、配偶者の研究のための結婚」
「皮肉的結婚よりひどい」
ゲゲゲを止められた麗子は、口を開けたまんまだ。
「求めよ、さらば与えられん、と云うだろ」
「荒野さんは、ダメモトで、お蝶さんに求めたのね。
だから、奇跡的に与えられたと云うわけね」
「莫迦ね。
求めたのは私のほう。
荒野さんはそれを解っていて、ああいう云い方をしたんだよ」
「どうせわたしはバカよ。
バカだから、もうお蝶さんのことは知らなーい」
麗子はそっぽを向いた。

二〇三〇年、七月十五日、午後七時。

麻暮正作と玄治は、まだ飲んでいる。
金之助は酔って、その場で寝てしまった。
「先生、飲み過ぎでは」
「それがさあ、ちっとも酔わないのよ。
ケケケ」
焼酎はいくらでもある。
お兼ばあさんが、肴をまた運んで来る。
「先生の好物ば、拵えやんした」
鯛の兜焼きと、鰻の叩き。
「これはこれは。
お兼さん、今晚はご飯は要りませんよ」
「鯛飯を作ってありますけん」
「ケケッ。
そいつもボクの大好物」

麻暮は手を叩いてから、玄治に向かって、
「やっぱり海底都市が完成しつつあるよ」
麻暮は、水中カメラで撮った映像を見せた。
玄治は顔をこわばらせ、
「そいつはもう、自衛隊にでも出動願わないと」
「それが常識だろうが、日本の政治のトップクラスは、みんな松本玄信の薫陶を受けた者たちばかりよ」
玄治は苦虫を噛み潰した表情で、
「荒野め、今度は何をやる気でしょう。
海底に第二の政界を作るのか。
それともゴジラのお宿かなんか」
麻暮はしばし宙を睨んでから、
「ボクの睨んだところでは、クスリの巨大製造所」
玄治も宙を睨んで、
「クスリとは、大麻とかコカインとか」
「風邪薬でないことはたしかだが、どんなクスリか今は解らない。
玄さん、〈阿片戦争〉って知っているでしょう」
「イギリスが阿片で巨利を貪り、清国国民は阿片で駄目になった」
「そういうことだね。
当時清は、阿片の禁輸措置をおこなっていた。
それでもイギリスは、阿片密輸で儲けていたのだ。
業を煮やした清は、阿片に関係した者を厳罰に処す法律を作った。
イギリスが怒り狂って発砲したのが発端。
1840年から1842年、二年間の戦争で清は敗北した」
「ひどい話じゃありませんか」
「江戸幕府が黒船に怯えたのは、阿片戦争の経緯を知っていたからだという説がある」
「あれも発砲して脅かした。
強力な軍備をバックにした、恐喝経済ですかね」
「昔イギリス、フランス、スペイン。
今アメリカ、中国、ロシアかな。
大国というやつは、いつの時代でも、そうやって出来上がっているのさ。
ケッケケ。
かつては日本も、大国の真似をして大失敗した。
大和魂があるんなら、幕末に外国と戦って敗北すべきだったんだ。
明治維新なんて誤魔化しをやったから、日本は勘違いして、背伸びした。
北朝鮮も、かつての日本のように背伸びをして、ああなった」
「イギリスも紳士面なんかして」
「ケッケケ。

荒野の紳士面と、似ていないかね」
「つまり荒野は、クスリで世界を駄目にしようよ。
それも阿片レベルではなく、大麻コカインレベルでもなく」
「それはボクの勘ですがね。
荒野だったら、決して大きい話ではないでしょう」
「たしかに。
それと例の、バケモノみたいなコードも、修復するのでは」
「そう、それはもう始まっていた。
ロボットたちが活動していたよ
美々社長の管理下にあるロボットたちとはちがう、海底作業に適したロボットたちだったな」
「ううむ。
核爆弾とクスリか。
ダブル攻撃で世界崩壊ですか」
玄治は深い溜息をついた。
「周りがあるだけ動いていて、未来計画カンパニーにいるはずの荒野自身は、じつに静かな気配だ。
あの静けさは、何か恐るべきものを孕んでいる気がする。
ボクのようなアナログ人間には、考えもつかないような何か」
麻暮は焼酎をぐびりとやった。

二〇三〇年、七月十八日、午後一時。

猪鹿蝶子は、未来計画カンパニーに向かっている。
今日はひとりだ。
昨日、美村麗子に声をかけたが、素っ気なく断わられた。
その素っ気なさの裏には、
(やれるもんならやってみなさいよ)
と云う、突慳貪さもあった。
(今度ばかりは、いつもの煽てが通用しないな)
と蝶子は考え、
「ふん」
と鼻を鳴らして、携帯電話（ガラケイ）を切ったのだった。
それから麗子に、かつて送ったことのないものを送った。
SMSで、メールを送ったのだった。

【どっちにしたって報告するわ／明日の午後一に帰路で】

江ノ電に揺られながら蝶子は、荒野大三郎のことは考えなくなかったので、陽羅義光のことを考えた。

(いくら偏屈で女嫌いと言ったって、どうして私のところに取材に来ないのだろう。

ノンフィクションノベル『巨人荒野』を継続するのなら、現在の主人公である私のことを知悉しないで、書けるわけがない。

せめて連絡くらいは、してきてよさそうなものなのに。

まさか、お亡くなりになっているんじゃ。

いやそれならば、いくら無名の作家でも、ネットくらいには載るだろうから、麗子が知らせてくれるはず。

もしかすると、もしかすると)

蝶子は電車内を見回した。

杖を手に坐っている、目をしょぼしょぼさせた小さな老人。

(あの人かな)

吊革に両手で掴まりながら、常にうとうとしている貧しそうな老人。

(あの人かな)

ドアに凭れて、スポーツ新聞を広げたり畳んだりしている、認知症のケがありそうな老人。

(あの人かな)

ぶつぶつぶつぶいつまでも、独り言をつぶやいている男女の区別がつかない老人。

(あの人かな)

グラマーの乳房を撫で廻す手付きで、自分の禿頭を撫で廻す助平っぽい老人。

(あの人かな)

なんて観察をしていたら、駅に着いた。

改札を出た蝶子は、一応振り返ってみたが、後を尾けてくる老人はいなかった。

蝶子は三日間のなかで、日比谷図書館に行って、陽羅義光の本を三冊借りることができた。

それらはたまたまノンフィクションノベルではなく、私小説と云ってもいい作品だった。

その小説から想定できる陽羅義光の姿は、目をしょぼしょぼさせた小さな老人であり、常にうとうとしている貧しそうな老人であり、認知症のケがありそうな老人であり、独り言をつぶやいている男女の区別がつかない老人であり、自分の禿頭を撫で廻す助平っぽい老人であった。

くわえて、大嘘つきの老人であった。

蝶子は苦笑しながら、江ノ島の大橋の先に聳え建つ、未来計画カンパニーのビルを眺めた。

約束した期日だったので、蝶子は無人受付も秘書も通さずに、十三階の荒野の部

屋に向かった。

エレベーターで、ロボットのタナカと一緒にしたが、お互い知らぬ仲なので、挨拶すらしなかった。

けれども蝶子の美しすぎる容姿に、漠然とした何かを感受したタナカは、蝶子のすがたを目の奥のカメラでいくつか写していた。

蝶子が扉を軽くノックすると、

「ドウゾ、開イテイマスカラ」

すぐに例の荒野の声がした。

麗子は深呼吸をひとつしてから入った。

荒野の姿は以前とは異なっていた。

どこがどうというわけではないが、正装している様子は判った。

相変わらずカジュアルな恰好をしてきた蝶子は、

「荒野さん、おしゃれですこと」

とお愛想を云った。

「プフイ。

猪鹿サンニ誉メラレテモ、嬉シクハナイデスネ」

「おや、どうして」

荒野は黄金仮面を揺らして、

「プフイ。

本心デハナイカラデスヨ」

蝶子は苦笑して、

「本心の他に、どう云う心があるのかしら」

「虚心、邪心、愚心、悪心、疑心、変心、逆心、ソレト」

蝶子は手で遮って、

「もうけっこうです。

それでは早速ですが、虚心、邪心、愚心、悪心、疑心、変心、逆心でお答えします。

荒野さんの三つの御願いは、総て全面的にイエスです」

平然と、もしくは冷然と云った。

黄金仮面が震えた。

「ホ、本当デスカ」

「イエス・キリストに誓って」

「感激デス。

信ジラレマセン。

長生キハスルモノデス

我ガ人生、最大最高ノ、時ノ時デス」

モウ、有頂天ニナリマス」

(最初から読んでいたくせに)

と蝶子は思ったが、そうは云わずに、
「私も有頂天です」
と言葉を合わせた。
言葉を合わせることで、〈夫唱婦随〉を約束したつもりだった。
荒野はそれを感知した。

荒野は、秘書に婚姻届用紙を持って来させた。
荒野がサインをし、蝶子もためらわずにサインした。
荒野は、グローブと云ってもいい手袋で蝶子の手を握り、
「猪鹿サン、アリガトウ」
万感をこめた声で云った。
「蝶子と呼んでちょうだい。
たったいまから私は、荒野蝶子ですから」
蝶子が笑顔で云うと、荒野は優しい声で、
「夫婦別姓ニシマショウ」
と云った。
「それはたしかに流行りですが」
「流行リハ、関係アリマセン。
ソノ方ガ、オ互イ、都合ガイイカト。
ナゼナラ、猪鹿サンハ、多分御両親ニ、コノ件ヲ伝エテイナイデショウ。
ソレヨリモ、ナニシロ荒野トイウ姓ハ、悪評判ガ高スギマスシ」
(なるほど)
と蝶子は思ったが、何か微妙なしこりが残った。
だがそれすらも、これからの研究対象なのだと、好奇心と向学心がしこりを揉み
ほぐした。
「トコロデ、百億円ハドウシマショウカ。
猪鹿サンノ指定ノ口座ニ、トリアエズ振込マセマショウカ」
「夫婦なんだから、そんな必要はないのでは。
寄附する先は、お互い相談して慎重に決めましょうよ」
「ソレナラ、ソノ線デ」
蝶子の言葉を予め知っていた口ぶりで、荒野は淡々と応じた。
つと、どこからか音楽が流れてきた。
部屋中をゆくりなく音楽が満たした。
それは蝶子が大好きな、バッハの『マタイ受難曲』だった。
「イエス・キリストに誓って」なんて、私が口走ったからかしら。
それとも、それとも)
いずれにしても、
(この巨大なビルで、荒野さんは独りじゃないんだ)
ということだけは解り、それは何となく蝶子の気持を萎えさせた。

何の前ぶれもなく荒野が手をたたくと、おもむろに壁が開き、壁の向こうの部屋があらわになった。

その部屋には、蝶子が見たこともない銀色の機材が据えられていた。

歯科の治療室に似ていたし、MRIやCTの検査室にも似ていた。

奥に、白衣を着たふたりの中年の男が立っていた。

窓がひとつもなく、壁が光るほど白いので、白衣が黄色く見えた。

「驚クホドノモノデハアリマセン。

コレハ私ノ、云ワバ、メンテナンス室デス」

(たしかに荒野さんの身体では、メンテナンスが必要だろう)

そこは納得したが、慇懃無礼な顔つきの、ふたりの男の登場には納得できなかった。

(もしかして、あのふたりが、荒野さんと私のバーチャルセックスを稼働させ監視するのかしら)

「科学博士ノ川上君ト、医学博士ノ木下君デスヨ。

イツモハ、私ノメンテナンスニ、尽力シテクレテイマスガ、今回ハ、オ約束ノオペレーションヲ、ヤッテモライマス。

オペト云ッテモ、一瞬デスシ、強力で安全な麻酔を注ぎますから、苦痛モ全クアリマセン。

因ニ彼等ハ、失敗シマセンカラ」

(早くも、私の脳味噌の一部を、荒野さんに貸す時がやってきたのだ)

蝶子は緊張し、それなりに不安や怯えもあったが、結果の愉しみがそれらを凌駕した。

荒野は立ち上がって蝶子の手をとり、エスコートした。

ふたりは、荒野云うところの「メンテナンス室」に入った。

入った途端、荒野の部屋との壁が閉まった。

蝶子はなんだか息苦しく感じた。

それでも、無音の空気清浄器が稼働しているのか、静かで空気は澄んでいる。

川上と木下が蝶子に代わる代わる近づき、丁重な姿勢と声で、

「それでは猪鹿さんの脳味噌の一部を、一時的にお借りする手術をさせて戴きます」

「苦痛は全くありませんし、お借りしている期間は、ほんの数時間ですが、その間は眠って戴きます」

蝶子は川上の導かれるままに、淡々と手術台に仰向けになった。

何も云わなかったし、云っても意味がないと思っていた。

頭に荘厳なほどの機材がかぶせられ、準備万端の木下が、蝶子の頸椎の傍に麻酔注射を射った。

痛みはなかったが、どこか不快だった。

その不快感の正体を、探す時間はなかった。

蝶子の意識は、ほぼ瞬時に消えたからだ。

直後に、荒野も蝶子の隣の手術台に仰向けになり、黄金仮面がはずされた。あらわになったのは、人間の顔ではなく、昔から絵に描かれて来た、宇宙人の素頓狂な顔だった。

「それでは、荒野大人。

当初の予定通りに実施いたします」

川上が丁重な姿勢と声で云った。

頭に荘厳なほどの機材がかぶせられ、木下が荒野の頸椎の傍に麻酔注射を射った。

荒野の意識は、ほぼ瞬時に消えた。

「さて」

「さて」

それを合図に川上と木下は、AI搭載の手術ロボットを操作した。

手術はスピーディーに、マニュアル通りに行なわれた。

蝶子の脳味噌を取り出す際に、木下が川上にこう聞いた。

「猪鹿さんの脳味噌と、荒野大人の脳味噌を、総てそっくり入れ替えるか。

それとも一部のみ残そうか」

「荒野大人の希望は、総てそっくり入れ替えることだったが、考えてみれば、記憶や情操を司る部分を一部残した方が、後々便利だろう」

川上の判断に、木下も同調する。

「荒野大人は造り物の身体を捨てて、これから猪鹿さんの肉体で活動するわけだが、猪鹿さんの親戚や仲間に勘付かれない方が当然やりやすいだろう」

手術は進み、一時間で終了した。

「荒野大人の造り物の身体と、猪鹿さんの脳味噌は処分するよう命じられたが、念のため冷凍保存しておこう」

木下が川上に伝えた。

「荒野大人の希望は、猪鹿さんの肉体に生まれ変わり、今後の生を全うすることだったね。

猪鹿さんの持ち物も、そっくりそのまま荒野大人の持ち物になるが、冷凍保存の件だけは、ふたりだけの秘密としておこう」

川上が云うと、木下は大きく頷いた。

木下は一呼吸置いて、

「ところで脳味噌が、新しい肉体に慣れるための時間が必要だから、新生荒野大人に目覚めて戴くのは、三時間後だ」

「つまり午後五時だ。

それでは私たちは、これから脳味噌サイズのハンバーグでも食べるとしようか」

二〇三〇年、七月十八日、午後五時。

川上宙門と木下太郎は、メンテナンス室にいる。

荒野大三郎の脳味噌を持つ猪鹿蝶子と、いや猪鹿蝶子の肉体を持つ荒野大三郎と会談中である。

蝶子の脳味噌の一部を残したことに就いて、川上が説明をした。

何となく精神と肉体の微妙な異和を感じるはずだが、拒絶反応は微小なので、一週間で完全に落ち着く旨を、木下が説明した。

その際、

「荒野大人」

と云う呼び方をして、これからは、

「猪鹿さん」

と呼ぶよう荒野に指示された。

* 作者は荒野に指示されてはいないので、猪鹿蝶子の肉体を持つ荒野大三郎を、これからも、

「荒野大三郎」

と呼ぶことにする。

そうでないと、これから荒野が行なう（かもしれない）悪事はみんな、蝶子の所為になってしまう。

荒野は、改めて丁重に頭を下げ、

「こんな大変な手術を、よく成功させてくれましたね」

木下は恐縮しつつも、

「100%成功する自信がなければ、手術をすることはなかったでしょう」

と答えた。

川上は表情を硬くして、

「それで猪鹿さんの、これからの計画を教えてもらえませんか」

荒野は美しく微笑して、

「川上君と木下君は当面、海底都市に集中してください。

私がこれからやることは、私ひとりでやります。

両君を、汚穢屋の片棒担ぎには、させたくありませんからね」

「つまり、糞便処理、と云うことですか」

「ふふい。

まあ、くそいまいましい、くそつたれめ、と云うことですかね。

ブラックリストならぬシットリストは、私の頭のなかで完成されています」

と云ってから荒野は、ひとりずつゆっくりと名前を挙げた。

「麻暮正作（まぐれ・しょうさく）

小林金助（こばやし・きんすけ）
竹田金之助（たけだ・きんのすけ）
玄治（げん・おさむ）
山風健一（やまかぜ・けんいち）
立原正男（たちハラ・まさお）
郷田狂介（ごうた・きょうすけ）
美村麗子（よしむら・れいこ）
陽羅義光（ひら・よしみつ）」

川上はすこし思案してから、
「はじめの五名は、天敵ですから解りますが、のこりの四名は天敵なのでしょうか」
荒野はまた美しく微笑して、
「ふふい。
天敵になる可能性がある、と云うことです。
そういう芽は、なるべく早く摘んでおかないといけません」
「しかし立原正男と云う人は、ただの喫茶店店主に過ぎないのではありませんか」
川上はまだ、腑に落ちない顔をしていた。
荒野は落ち着いた静かな声で、
「帰路は、連中の溜まり場になっていました。
多くの情報が、立原さんの記憶のなかにあります」
「そうですか。
納得しましたが、郷田狂介は命の恩人ではありませんか」
荒野は、より落ち着いた静かな声で、
「昨日の友は今日の敵、と云うではありませんか。
郷田さんは私に執着していました。
けれども私が黙って逃げ出したので、いままでの愛情が、憎しみへと変わっています」
「そうですか。
納得しましたが、美村麗子は無害なのではありませんか」
荒野は、さらに落ち着いた静かな声で、
「麗子さんは蝶子さんの従妹です。
私は上手く演技するつもりですが、それでも小さい時からいつも一緒の麗子さんが、蝶子さんの変貌に気づかないわけがありません。
もしかすると彼女こそ、ブラックリストのトップにくる存在かもしれません」
「そうですか。
納得しましたが、最後のひとは一体何者なんでしょうか」
荒野は首をふりふり苦笑して、
「ふふい。
陽羅義光さんと云うのは、ひどく貧乏で全く無名の作家です。」

それ以上の正体は、よく解らないのですが、『巨人荒野』と云うノンフィクションノベルを、全作家HPに勝手に連載しています。

読むに耐えない、読む意味のない内容なので、私はなるべく読まないようにしていますが、あの内容を真実だと思い込んだ読者たちが、ネットで〈荒野を倒せ〉なんて書き込みをしています。

名誉毀損で訴えてもいいのですが、無一文の人から賠償金は取れないし。

裁判でHP掲載を止めてもらっても、ライフワークを自認しているそうですから、海賊的なやりかたで発表するでしょう。

ふふい。

それに裁判なんかになると、まずいのは私の方ですものね。

執筆継続中らしいのですが、万一予告的予言的なことを書かれでもしたら、大変困ります。

自称惚け老人、との話も聞きましたが、作家と云うものは本質的に嘘つきですから。

かつて『死んだる団』を書いた、山内参三さんも、困った存在でしたが、高齢のためにもう書けなくなっていますから、それは噂ではなくこの眼でたしかめてもいますから、ブラックリストからはずしました。

舟木英介さんは優秀な探偵でしたが、昔から私にとって天敵だったことはありません」

「そうですか。

万事、納得しました。

本当に私たちが、お手伝いすることはないのでしょうか。

芽の摘み方次第では、私たちの方が適任かもしれません」

「ありがたいけれども、こういうことは体験上、ひとりの方がやりやすいものです。

芽を摘む、と云う言葉が、おそらくいけなかったんですね。

芽を枯らす、と云う言葉を使えば、よかったのかもしれない。

まあ、見ててごらんなさい。

ふふい。

海底都市で大量製造しているクスリの、テストにもなりますよ」

二〇三〇年、七月十九日、午後一時半。

美村麗子は「帰路」で、猪鹿蝶子を待っている。

約束の時間から、三十分が過ぎている。

そんなことは、いままで一度もなかった。

いちおう蝶子の携帯に電話とメールを入れたが、やはり反応はない。

秘書に電話を入れたが、これも反応なし。

(やっぱり、かどわかされたのね)
と思ったが、かどわかされる人でないことは解っているので、
(Mの本性が出たんだわ)
と思うしかなかった。
麗子の選択肢は三つあった。

- 一、蝶子の両親に報告する。
- 二、警察に捜索願いを出す。
- 三、未来計画カンパニーを探索する。

一は諦めた。
父親とは血のつながりがないし、母親とはお金のつながりしかない。
「そのうち出てくるわよ」
なんて云われるのがオチだろう。
二も諦めた。
警察が大嫌いな蝶子の気持ちを、逆撫でするわけにはいかない。
それに、江ノ島唯一の多額納税会社を、江ノ島警察署が捜索するはずがない。
三も諦めた。
自分の力ではとうてい不可能だ。
(四と云う選択肢もあるかしら)
と思った。

- 四、すべて諦めること。

左手で頭を抱え、右手はクリームソーダのクリームをつぶし、グリーンソーダとまぜた。
(そうか)
と思いついた。
(三、復活よ。
自分の力ではとうてい不可能でも、優秀な探偵に依頼すればいいんだわ)

優秀な探偵を、郷田狂介しか知らなかった麗子は、郷田に電話を入れた。
「美村麗子ですが、いつぞやは失礼しました」
「まったく、失礼もいいとこよ。
あんたたちが来た所為で、荒野大人に逃げられちゃったじゃないの」
言葉と違って、声調はやわらかだった。
麗子は安堵して、
「じつは依頼したいことがあって」
「まさか、荒野大人を捜せってことじゃないわよね」

「いえ、従姉の猪鹿蝶子が行方不明で」
「あんたは行方不明じゃないのね。
GPSによると、もしかして帰路なの」
「当たりですわ」
「それなら三十分待ってね。
愛車飛ばして、これから行くから」

きっかり三十分で郷田はやって来た。
郷田もクリームソーダを注文して、
「猪鹿さんは、荒野大人のどこへ行ったのね」
「どうして知っているんですか」
麗子は大袈裟に驚いてみせた。
「探偵はさあ、それくらいの勘がなければつとまらないのよ」
郷田は一瞬で天狗になった。
「それで、捜索依頼は受けて戴けるんでしょうか」
「あたしは、依頼を断わらない探偵として、有名なのよん」
「よろしくお願いします」
「でも、高いわよ」
麗子は蝶子の母親を思った。
（「お蝶さんのためにお金が必要なのよ」
のひとことで大金を振込んでくれるはず）
「安い探偵には頼めないわ」
この言葉は郷田をさらに天狗にした。
「まかせなさい、まかせなさい。
猪鹿さんを発見して、美村さんの前に連れてくればいいのね。
一両日あれば充分よ」
豪語した郷田は、クリームソーダに手をつけずに、帰路を後にした。

二〇三〇年、七月二十日、午前十時。

郷田狂介は、未来計画カンパニーの無人受付にいる。
「だれかいないの」
と声をかけると、どこからか秘書が登場した。
「あいにく今日は、当社の創立記念日で、お休みです」
「都合が悪いとそう云うんでしょ。
いったい年に何回創立記念日があんのよ」
郷田は怒鳴った後で、急に優しい声に変わり、

「ねえ、会社は休みでも、荒野大人はいるはずよ。
命の恩人の郷田が、やってきたと伝えてちょうだい」
「それでは少々お待ちください」
秘書はスマホを操作していたが、頷きながら郷田を注視して、
「あいにく不在ですが、おそらくあなたが探しているはずの、猪鹿蝶子さんならお
いでになります」
「まあいいとしましょう。
では早く猪鹿さんに会わせてよ」
郷田がせつつくと、秘書は後ずさりして、
「私めが出入り禁止の部屋におります。
担当のロボットに案内させますから」
秘書が指を鳴らすと、どこからかロボットが登場した。
「担当ロボットのタンちゃんです、よろしく」
秘書の言葉が終わると、タンちゃんが、
「ソレデハ、私ノ後ニ、着イテ来テクダサイ」
エレベータースクエアの方向に進むタンちゃんの後から、郷田は鼻歌を歌いなが
ら付いて行った。

どんぐりころころどんぶりこ
お池にはまってサア大変
荒野が出て来てコンニチハ
蝶さん一緒に遊びましょう

タンちゃんが拍手をした。
郷田は照れ笑いをして、
「あんた男、それとも女」
と冗談めかして聞いた。
「オカマデス」
タンちゃんは真面目な声で答えた。
「大発見だわ。
ロボットにもオカマがいるのねえ」
郷田がはしゃぐと、タンちゃんは真面目な声で、
「ロボットニハ、オカマダケデナク、探偵モ泥棒モ殺シ屋モオリマス」
郷田は首をすくめ、口を閉ざした。
タンちゃんと郷田はエレベーターに乗り、タンちゃんは十三階を押した。
エレベーターのスピードは、ジェットコースターより早かった。
十三階で降りると、タンちゃんは一番奥を指さし、
「アソコノ部屋デス。
ソレデハ私ハココデ失礼シマス」

郷田の反応を待たずに、別のエレベーターで戻ってしまった。
郷田は麗子にメールを送りながら、ゆっくりとその部屋に近づいた。

【猪鹿さんと一分後に会います／なんとか連れて戻ります／またメールしますので返信無用】

郷田が扉を軽くノックすると、
「どうぞ、開いていますから」
すぐに声がした。
女の声だ。
郷田が顔から部屋に入ると、そこにいたのは間違いなく猪鹿蝶子だった。
猪鹿蝶子の容姿の荒野大三郎だった。
荒野は椅子に坐り、机上のパソコンを操作していたらしい。
机上にはクリームソーダがあり、クリームはつぶされて、グリーンのソーダとまざっていた。
「お久しぶりです、郷田さん。
いつぞやはお迷惑をおかけしました」
じつに丁重で低姿勢だった。
郷田は何となく違和感を感じたが、
「さっそくですけど、従妹の麗子さんがとても心配しているのよ。
あたしと一緒に帰りましょう」
と伝えた。
荒野は一呼吸してから、
「当然そうだと思っていたけど、時間が解決すると考えていたの。
人間は、時間が経つと忘れる生き物だから。
でも、すぐには帰れないの」
「どうしてなのよ」
当てがはずれた郷田は、大声を出した。
荒野は落ち着いた静かな声で、
「麗子に聞いてごぞんじでしょうが、私はここに荒野さんを訪ねてやってきたの。
けれども荒野さんは、外国に行ってしまったとのことで、しかも長い旅とのことで、そのショックからか、私は倒れてしまったの。
ここのロボットたちに助けられ、いまは静養中で、動きたくとも動けないんです。
いずれ大丈夫になったら麗子にもちゃんと連絡するので、心配しないよう伝えてください」
このとき荒野はわざと、クリームソーダのストローを掴みそこなって床にこぼした。
「ほら、まだ手足がこんな状態なのです」
云っていることに疑問は生じず、しかたなく郷田は引き上げることにした。

それでもひとつだけ質問をした。

「荒野大人は、何のために外国に行ったのかしら」

やはり荒野は落ち着いた静かな声で、

「それは荒野さんご本人に聞かないと解らないことですが、私の勘と秘書さんの言動とロボットたちの噂を総合すると、やっぱり静養とのことです。

運良く郷田さんに助けられたものの、だいぶ身体が弱ってしまったとのことで、それでも郷田さんの特製スープのおかげで持ち直したらしいの。

けれども、あれこれ心配事があって、郷田さんの別館から逃げ出したから、郷田さんには恨まれているはず。

もう二度と郷田さんの特製スープは飲めないだろうが、外国に行けばあのスープと同じ味同じ滋養か、少なくとも似た味似た滋養かが、発見できるかもしれないと云うことが、外国行きのきっかけになったらしいわ」

この説明に、疑り深い郷田でも、何の不満も感じなかった。

それどころか、郷田は相当に気分を良くして、部屋を退出した。

未来計画カンパニーのビルを出たところで、麗子にメールを送った。

【猪鹿さんと面会できました／静養中ですが全く心配はありません／詳しいことは本日午後一に帰路で】

二〇三〇年、七月二十日、正午。

小林金助は、未来コスモス院で昼食をとっている。

介護ロボットのタナカが世話をしている。

世話と云っても金助はまだ何でもできる。

昼食を運んできたタナカに金助があれこれ頼むので、結果として世話をしていることになるのだ。

醤油を持って来てくれとか、食道に食べ物が詰まったから背中を叩いてくれとか、しばらく話し相手になってくれとか。

「どうだいタナカ君、最近の未来計画カンパニーの様子は」

金助は、荒野が戻っていると考えているのだ。

「具体的ニハ云エマセンガ、ダイブ感ジガ変ワリマシタネ」

「新しい社長は、どうでやんすか」

「美々社長ハ、トテモ気遣イノアル人デス」

「若くて美人で、仕事ができるとなったら、天は三物を与えたと云うことでやんすね」

「美人デ思イ出シマシタガ、社長ヨリズット美人ヲ、会社デ見カケマシタ」

「それは社員なのかな」

金助には、何か感知するものがあった。

「お客様デス」

「だれのお客なの」

「ソレガ解ラナイノデス。

社長ノお客様ナラ、七階ニ行クハズ。

彼女ハ確カ、十三階ニ行キマシタ」

「十三階にはだれかいるのかね」

「ダレモイナイハズデスガ」

「むむむ」

と唸る金助に、タナカは自分の目の奥を見るよう促した。

「金助サンノタメニ、写真ヲ撮ッテオキマシタ。

ドウデス、ヨク見エルデショウ」

「どうして、あっしのためなんだい」

と云いながら金助は首をのぼした。

「見える見える。

これは凄い美人だね。

しかしいったい何者かなあ」

「大キナ手帖ミタイナモノ、持ッテイタカラ、大学生ノ社会見学カモ知レマセン」

「タナカ君さあ、社会見学なら、だれか案内人が一緒のはずだよ。

だれもいないはずの十三階へ、一人で向かったと云うのは、この日が初めてではないな」

十三階と云うことから、

(もしかすると彼女は荒野に会いに行ったのかもしれない)

と、金助は考えた。

(もし荒野が戻っているとしたなら、おそらく十三階だろうから。

それでも大きな疑問が在った。

(それが当たっているとしたなら、彼女は何のために荒野に会いに行ったのか)

「とにかくタナカ君ありがとう。

ずいぶんと目の保養になったでやんす」

「ホラ、金助サンノタメニナッタデショウ」

「一本とられたなあ」

金助は声をあげて笑ったが、目は笑ってはいなかった。

二〇三〇年、七月二十日、午後一時。

麗子は「帰路」で郷田の報告を受けている。

郷田は報告を終え、

「まあ、そういうことだから、猪鹿さんからの連絡をしばらく待つしかないわね。
連れて帰れなかったから、お金は要らないわ」

麗子は蝶子の母親に連絡する面倒が省けたと、内心安堵したが、安堵できない別のものを感じていた。

「いくつか質問があるんだけど、いいでしょうか」

「あたしの報告に、何か不満とか疑問とかがあるの」

郷田は不満げな顔をした。

「不満なんかありません。

疑問があるとしたら、郷田さんの報告ではなく、お蝶さんの態度とか様子。

お蝶さんの他人への接し方の三大特徴は、平静、淡々、簡素。

いまの郷田さんの報告には、その三大特徴が感じられないの」

「だったら何よ。

あたしが会ったのは、別人だとでも云うわけ。

もしかして、猪鹿さんには双子の姉妹でも」

「いません。

それで質問なんですけど、お蝶さんは椅子に坐っていたとおっしゃいましたが、机もあったんですか」

「椅子と机はセットよ。

机上のパソコンを弄っていたわよ」

「パ、ソ、コ、ン」

麗子は愕然とした。

「何か問題でもあるの」

「お蝶さんは生粋のアナログ派。

パソコンなんか弄るどころか、見るのも厭だって」

「あれれ。

そりゃおかしいわね」

「他に何か気づいたことはないかしら。

小さなつまらぬことでもいいの」

「つまらぬことねえ」

と云ってから、郷田は麗子が注文したクリームソーダを見詰めて、

「つまらぬことだけども、猪鹿さんもクリームソーダを飲んでいたわね。

そう、そんなふうクリームをつぶして、グリーンソーダとまぜてさ」

「こんなふうですって」

麗子はさらに愕然として、大声を發した。

「なによ、びっくりするじゃない。

つまらぬことで騒ぐんじゃないの」

「お蝶さんじゃない、お蝶さんじゃないわ。

郷田さんが会ったのは、お蝶さんじゃないのよ。

お蝶さんはクリームはクリーム、ソーダはソーダ、絶対に合体しないのよ」
首を前に突き出して麗子は叫び、郷田の顔に唾が飛んだ。

郷田はしかめっ面をして、

「意味が解らないわ。

だったら、あたしが会ったのはだれなのよ」

「荒野さんは、お蝶さんに求婚していたのよ。

だったら、だったら、合体、合体、合体したんだわ」

「何それ。

合体しないとか、合体したとか、〈釣りバカ日誌〉じゃあるまいし、イヤらしい」

「郷田さんが会ったのは、荒野さんとお蝶さんの合体なのよ。

きっとそうだわ。

そうでなければ、納得のいかないことばかり」

ギギギと音が立つほど、麗子は強く歯ぎしりをした。

「要するにどういうことよ。

どういう合体なのよ」

郷田もだんだん興奮してくる。

「きっと」

と云ってから、麗子は震える声で、

「きっと、荒野さんの脳味噌を、お蝶さんに移植したんだわ。

お蝶さんの脳味噌を借りるだなんて、嘘っばち。

ああ、わたしはどうしたらいいんでしょう」

ヒイと麗子は泣き出した。

話の内容を聞いていない立原が、びっくりした顔で、カウンターの向こうから見ていた。

「あたしもどうしたらいいんでしょう」

郷田は呆然とした。

(美村さんの云っていることが、妄想でなかったとしたなら、荒野さんはいったい何を画策しているのか)

郷田は改めて、数時間前の猪鹿蝶子との会見を思い起こしてみた。

(平静、淡々、簡素か。

そんな雰囲気すらなかった。

パソコンか。

クリームソーダか。

そんなこと、あたしが知るわけがないわ)

麗子の言葉が、郷田の頭のなかでようよう信憑性を帯びてくると、後悔の念も湧いてきた。

(美村さんも一緒に連れていけばよかったかしら。

あたしがカッコつけたのがいけなかったのかしら。

しかしそうしたら、相手が猪鹿さんであろうと荒野さんであろうと、きっと会っ

てはくれなかつただろう)

自分が荒野を救った結果、こういう面倒なことが発生したかと考えると、忸怩たる思いは頂点に達した。

すでに荒野に対する思い入れが、ほとんど消えかかっている郷田は、竹田金之助にメールを入れた。

【麻暮先生には会えましたか／あたしも先生に会いたいので居所を教えてください／とんでもない荒野情報を手に入れたので】

その後で麗子を慰めにかかった。

「新興宗教の教祖に、洗脳されたと思えばいいのよ。

脳味噌が別でも身体が同じなら、猪鹿さんは死んだわけじゃないんだからさ。

時間が解決するのを待つしかないけど、微力ながらあたしも、やれそうなことは何でもやってみるからさ。

麻暮正作が生存している間は、荒野さんだって勝手なことはできないはずよ」

麻暮の名を聞いて、麗子は泣きやんだ。

「これから本物の麻暮先生に会えるかもしれないけど、そしたらあなたも一緒に行くわね」

麗子は頷いた。

このとき金之助の返信が届いた。

【銚子の病院にいたのは玄さんでした／ふたりで麻暮先生の処に居ます／場所は三浦半島の観音崎です／近くまで来たらまたメールください】

「麻暮先生の居所が解ったわ。

あたしの愛車でこれから行きましょう。

さあ、元気出してね」

郷田は立ち上がった。

麗子は泣き笑いをして、郷田に感謝のハグをした。

二〇三〇年、七月二十日、午後三時。

郷田狂介と美村麗子は、観音崎に向かっている。

郷田の愛車BMWは、制限時速60キロの道を100キロで駆けた。

「スピード出し過ぎて、掴まるんじゃないかしら」

麗子が心配すると、

「事故の心配はあるけど、掴まる心配はないわ。

神奈川県警察の幹部は、みんなあたしの仲間だから」
郷田は偉そうに云った。
云いながら、「みんな」どころか「唯一の」仲間であった、鎌倉署の山風健一署長のことを想った。

観音崎が近づいて、郷田が金之助にメールを送ると、観音崎の灯台下まで迎えに出るとの返信が来た。

「なんかドキドキします。

本物の麻暮さんって、どんな方なのかしら」

シートベルトを掴みながら麗子が郷田に声をかけると、

「そうね、そうでしょうね。

あたしも初めて会ったときは、そうだったわ。

なにせ懂れていた伝説の名探偵だもの。

あたしは、ホームズやポアロやマーロウを想像していたんだけどさ、ホームズよりも勇気と知性があるって、ポアロよりも気高く優しくてさ、マーロウよりも無鉄砲でかたゆで卵だったわねえ」

郷田は懐かしそうに答えた。

「かたゆで卵って」

麗子が聞くと、郷田は苦笑しつつ、

「ハードボイルドってことよ。

あなた、もっと探偵小説読みなさいな」

「探偵小説どころか、小説って駄目なんです。

お蝶さんはめちゃくちゃ読むけど、小説ってアナログでしょ」

郷田は呆れた声で、

「小説ってのはさ、アナログとかデジタルって次元ではなくて、人間のマインドに響くものでしょ。

マインドってものは、古今東西・古往今来、永久不変のものよ」

麗子は反撃口調で、

「お蝶さんのマインドとわたしのマインドは、とても違うわ。

まるで別次元のものみたい」

「それは錯覚よ。

あと二十年経ったら、そのことに気づくわ」

と郷田が云ったとき、観音崎の灯台下に着き、そこに立っていた金之助が手を振った。

二〇三〇年、七月二十日、午後六時。

荒野大三郎は、メンテナンス室で木下太郎のチェックを受けている。

川上宙門も木下の助手をつとめている。

今回は全裸での診察なので、木下も川上も初めて見る猪鹿蝶子の生の肉体に目を見張らざるを得ない。

「これはじつに、ビーナスですな」

木下がつぶやき、

「これはじつに、国宝級ですな」

川上がつぶやいた。

それでも木下は医学の専門家としての矜持を保ち、あらゆる検査器具を駆使している。

そのうち木下が首を傾げ、川上が声をかける。

「どうかしたのかい」

「どうもこうも。」

AIの解答では、精神と肉体の微妙な異和が落ち着くには、一週間ほどかかるはずだったが、もう完全に落ち着いている。

これは奇妙で、AIもびっくりだろうが、荒野大人と猪鹿蝶子さんの相性がよっぽどいいんだろう」

川上は頭をかいて、

「いやはや。」

科学でも医学でも、正確な解答が出ないことは、いまだにあるんだねえ」

ふたりの会話を聞いていた荒野は、

「それは都合がよかった。

一日でも一時間でも早く動かないと。

なにしろ麻暮さんの行動は、宇宙ロケットより早いから。

ぷふい」

「荒野大人、さっそく何をなさるおつもりで」

川上が聞いた。

「麻暮さんの妨害を食い止めるには、まずは外堀を埋めることですね」

「外堀、ですか」

「徳川の豊臣対策、いや真田幸村対策かな。

そう云えば、麻暮さんのやり方は真田幸村に似ていますね」

「ユキムラってだれですか」

川上と木下が同時に声を挙げたので、荒野は呆れた様子で、

「両君は科学と医学の天才ですが、これからは歴史を学ばないといけませんね」

木下は弁解口調で、

「歴史って駄目なんですよ」

川上も弁解口調で、

「歴史ってアナログですからねえ」

荒野は諭す口調で、

「歴史ってのはね、アナログとかデジタルって次元ではなくて、つまりは人間の生き方なんですよ。

人間の生き方ってものは、古今東西・古往今来、いくつかのパターンしかないものでしてね。

ふふい」

川上は不満げな顔で、

「僭越ながら、科学的に云いますと、人間の生き方はパターンが多すぎて、パターンには成り得ないものです。

しかもネット社会の現代は、その多様化が甚だしくなっています。

歴史をよく学んだ人でも想像のできないくらいの、人間の生き方が出ているんじゃないでしょうか」

木下が後を継いで、

「失礼ながらたとえば、荒野大人の生き方なんて、過去の歴史のどこに痕跡があると云うのでしょうか」

「それは知らないだけでね。

私だって、歴史から学んで己の生き方を形成しているのです。

両君も歴史をよく学べば、そのことに気づくはずですよ」

木下も川上もそれきり黙り込んだ。

ただ、畏敬する荒野大人に諭された感覚よりも、若い才媛に言葉で誤魔化された感覚が上回っていて、内心釈然とはしていなかった。

二〇三〇年、七月二十日、午後八時。

美村麗子は、麻暮正作の隠れ家で歓待されている。

郷田狂介が、麗子の持つ疑惑を解りやすくみんなに報告すると、竹田金之助は焼酎を注ぎ、玄治はあれこれ慰め、お兼ばあさんは麗子のために、麗子の好物の海鮮丼を作ってくれた。

麻暮正作はそんなみんなを鉄仮面の奥の目を細めて見ている。

麻暮に対する麗子の第一印象は、郷田邸の別館で会った偽の麻暮とは全くの別人であった。

あのときに感じた胡散臭さや慇懃無礼さや口の巧さ甘さは全く感じられず、そういうものとは無関係の朴訥な人柄を感受した。

平静で淡々とした雰囲気、簡素な佇まい。

(どういうわけかお蝶さんに似ている)

と麗子は思った。

蝶子が荒野に抱いた憧憬と似たものを、麗子は麻暮に抱きそうになっている自分を感じ、おもわずくすぐったそうな気分になった。

(もしかして)

焼酎で酔った頭で、麗子は考えてみた。

(荒野さんがお蝶さんと合体したかったのは、もしかして本当は麻暮さんと合体したかったのかも)

しかしこれは自分の勝手な考えと判定したので、口にもせずこれ以上考えるのもやめた。

しばらくして金之助が麻暮に声をかける。

「猪鹿さんに成り済まして、荒野はいったい何をしでかすつもりでしょうかね」

麻暮はすこしだけ間を置いてから、

「海底都市はおそらく今年中に完成する。

荒野の身に成って考えるなら、その前にまずは邪魔者を消す、と云うことだろう」

「邪魔者って、自分らのことですか」

「ケケケ。

本質的には、最終的には、ボクのことだが、ボクを消す前に、外堀を埋めるかもしれない」

「外堀ってまさか」

「そう、ボクのブレーンですよ。

あなたがたは今ボクの近くにいるから、荒野も簡単には手を出せないだろうが、心配なのは金助さん」

「けれども親父さんにはタナカ君も付いているし、未来コスモス院はセキュリティもしっかりしているし」

「だがもともと、荒野が介護ロボットを派遣していた施設だからねえ」

金之助は蒼くなり、

「解りました。

自分はすぐに行きます。

借りている電気自動車も返さないといけないし」

「いま行っても入ることはできない。

行くなら明日の早朝、施設の門が見える場所で見張るのが、賢明だろう」

「あそこの前にはマクドナルドがありますから、自分はそこで見張ります」

ここで郷田が口を出す。

「明朝、美村さんとあたしは帰るから、一緒に行きましょう」

麗子が咄嗟に、

「わたしはここに残るわ」

と云ったので、郷田も金之助も怪訝な顔をした。

麗子はふたりを見て、

「だって学校は夏休みだし、あれこれ疲れたからのんびりしたいし、お兼さんのお料理ももっと食べたいし」

聞いていたお兼ばあさんは、じつに嬉しそうに笑ったが、麗子の本心は別に在っ

た。

荒野に乗っ取られた蝶子の姿を見たくはなかったし、麻暮とも離れたくはなかったのである。

二〇三〇年、七月二十一日、午前十一時。

山風健一は家にいる。

体調不良で二週間休んでいたが、明日から復帰するつもりでいた。

今年いっぱい定年退職の予定だから、これ以上は休みたくはなかった。

それでも休んでいる間中は、荒野大三郎の資料をまとめたり、鎌倉署の若い警官に教えてもらった『巨人荒野』をパソコンの画面で読んだりもしていた。

いまもその続きを読んでいて、復帰したらいずれ遠からず作者の陽羅義光に会いたい、いや会わねばならないと漠然と思っていた。

そこに来客があった。

山風が玄関まで出てみると、クリーム色のサマースーツの美人が微笑みながら立っていたので、ひたすら驚くばかりだった。

驚きつつも、美貌を活用した保険か何かのセールスだろうとも思って、一応用心深く身構えた。

「あの、私に何かご用でしょうか」

「私は東大の大学院の院生で、猪鹿蝶子と申します。

実は以前から荒野大三郎のことを調べていて、署長さんにどうしてもお話したいことがあります。鎌倉署に伺ったら、ご自宅だと告げられて、突然で失礼ですがお伺いした次第です」

その話ぶりに嘘はないと判断し、また荒野の情報なら聞いておかねばならぬとも考え、山風は中に入るよう促した。

「あいにく家内は買物に出ているので、何のお構いもできませんが」

と云いながら、山風は居間に正座している荒野に、冷たい麦茶を持って来た。

荒野はそれを一口飲んでから、手帖とペンを手にしたまま、すぐに話し始めた。

郷田邸の別館でひっそりと養生していた鉄仮面に、従妹と共に面会に行ったこと。

鉄仮面は脱走してしまっただが、ドローンで追跡すると鉄仮面の姿は江ノ島の海で消えたこと。

もしかすると鉄仮面は、麻暮ではなく麻暮を装った荒野ではないかと疑ったこと。

おそらく未来計画カンパニーに戻っていると思ったので、従妹と面会に行くと、鉄仮面が荒野であったことが明白になったこと。

それは山風にとって、まったく知らなかった情報であり、とは云え信憑性の高いものと判断せざるを得ないものだったので、荒野の話に夢中になり、若い女性の首

筋の汗の匂いを嗅げるくらいだんだん前のめりになっていった。
続きを話しながら、荒野は手にしたペンを山風の首筋に、微かに当てた。
瞬時に山風はその場に倒れ、鼾をかいて眠り始めた。
荒野は、座布団と麦茶のグラスを片付けてから、外へ出た。

山風の妻が買物から帰って来たのは、十五分後だった。
「ただいま。
ちょっとレジが混んでいて、遅くなりました。
あら、そんなところでうたた寝して、夏風邪をひきますよ」
山風は目を覚ました。
「おかえり。
あれ、どこかへ行っていたのかい」
「買物行くって云わなかったかしら。
留守中、電話とか来客とかありませんでしたか」
「ないない、何もなし」
「眠ってしちゃあ、何もなしでしょうね」
「何もなし、眠ってもいない」
山風は大欠伸をした。
それから妻をシゲシゲと見詰めて、
「ところで、あんたはだれ」
寝惚けているのかと思った妻は、夫の背中をポンと叩いて、
「ちょいと居眠りしただけで忘れられちゃあ、三十年連れ添った意味がないじゃないの」
「三十年がどうしたのか、意味が解らん。
だいたい、わたしはだれ」
妻は目を丸くした。

二〇三〇年、七月二十一日、午後一時。

立原正男は、「帰路」で軽食ランチの後片付けを始めている。
今日もいつもどおり、二十人分のランチがはけた。
ここ数年は、この計算が狂ったことはない。
それだけ常連客で成り立っている店と云うことだろう。
この時間になると、ランチ客はみな帰り、三時になるとコーヒー客が来る。
だから麻暮ブレーンのミーティングは、決まって「午後一」なのだ。
客が入って来た。
麻暮ブレーンではないが、初めての客ではない。

「マスター、お久しぶり」

愛想よく声をかけてくれたのは初めてだ。

カウンターに坐ったので、その美貌に圧倒されながらも、立原は注文を聞いた。

「前と同じものを」

と云われたので、

「クリームソーダのクリームが切れてしまって」

と答えると、

「それならアイスコーヒー、ガム抜きでいいわ」

立原は昨日のこの時間のことを思い出し、

「そう云えば、従妹さんが心配していたようですが。

昨日のいまごろ、そこのテーブルで郷田さんと一緒に」

「麗子は心配性なのよ」

と云ってから、荒野は、

「それで麗子はどうしたのかしら」

立原は何の疑いもせずに、

「郷田さんの車で麻暮先生の処へ」

「それじゃ迎えに行かないと。

場所は何処かしら」

「正確には聞いていませんが、観音崎です」

荒野は手帖にメモをとるふりをして、アイスコーヒーを出した立原の手の甲にペンを微かに当てた。

立原はカウンターのなかに崩れ、そのまま躰をかきはじめた。

荒野が去って、五分もすると、店の電話が響いた。

立原はすぐに起き上がって、カウンター端の電話に飛びついた。

「はい、帰路でございます」

これは習慣であって、頭は使っていない。

電話の相手は郷田だった。

「あたしはもう帰ってるんだけどさ、ランチ残ってるかしらん」

「ランチって、どこのランチでしょう」

「あんたんとこのランチに決まっているでしょうが」

「あんたって、どなたでしょう。

あなたも、どなたでしょう」

「立原さんったら、あたしのこの可愛い声を忘れたのお。

郷田よ、郷田に決まってるでしょ」

「わたしは郷田で、あなたは立原」

「逆でしょが。

冗談はもうおしまい」

「何かおしまいになるんでしょうか」

「あらまあ」

と嘆声を発したなり、郷田の電話は切れた。

二〇三〇年、七月二十一日、午後二時。

竹田金之助は、未来コスモス院の門が見えるマクドナルドの二階の窓際に居る。午前九時前からここで見張っているが、猪鹿蝶子らしき姿は見られない。

麗子から、蝶子の写真は何枚も見せられたが、こんな美人が登場したら、そこに大きな光が発生するはずだと考えている。

大きな光どころか微光すら見受けられない。

車椅子に乗った人たちと、それを押す介護人や介護ロボットばかりを見ている。

五分前に救急車が到着したが、施設に入っているだれかが急病になったのだろう。

(親父さんでなければよいが)

と思いつつ、

(親父さんが急病で倒れるわけがない)

とも思っていた。

そのとき小林金助は、救急車の搭乗員ともめていた。

「救急車なんかだれが呼んだんじゃい」

「こちらの施設の責任者から連絡を戴いたので、担当の看護師さんにも同乗して戴いて至急参上したのです」

「あっしはどこにも異常はないし、だいたい担当の看護師なんかいないぜ」

金助は声を荒げる。

そこに入ってきたのは、「担当」と云われた女性の看護師である。

マスクに白帽、白衣姿で、眼の部分だけが見える。

それでも、美しい容貌と肢体であることだけは解る。

女性と云うことで金助に油断があったのか、部屋から追い出すことはしなかった。

手帖とペンを手にした彼女は、

「山田一平さんですよ」

と金助を見ずに云った。

「あっしは小林金助でやんすよ」

そう答えたのと、気づくのと同時だった。

(この看護師の雰囲気は、タナカ君が見せてくれた女性の写真に似ている)

けれども、ペンが金助の足先に微かに当たるのも同時だった。

金助は突如として眠りに入り、看護師すなわち荒野は、救急車の搭乗員に対して、

「連絡ミスか、イタズラ電話だったようね。

とりあえず戻ることにしましょう」

金之助は救急車が去っていくのを何げなく見ていたが、病人を乗せた気配がないのと、サイレンを鳴らしていなかったのを思った。

(連絡ミスと云うことか、それともイタズラ電話か)

それは不審でも疑問でも何でもなかったが、女性看護師の姿が垣間見られた事実には、首を傾げざるを得なかった。

(救急車にどうして看護師がいるんだろう。

どうして、どうして、しかも女性の、女性の)

「しまった」

と金之助は叫ぶと、マクドナルドを飛び出した。

勢い込んで金助の部屋に駆け込んだが、金助が安らかに眠っているのを見て、胸を撫で下ろした。

どうあれ今日はここに付き添っていようと思って、父親の手をそっと握ると、それだけで金助が眠りから醒めた。

「親父さん、すみません、起こしてしまいましたね」

金之助の言葉に、初め金助は反応しなかった。

「親父さん、問題はありませんか」

と金之助が再び声をかけると、

「すみませんね、何か世話をかけたようで」

金助らしくもなく気弱に答えて、金之助の手をそっと離れた。

「問題がなくとも心配がありますから、自分はしばらくここに居ようと思います」

金助は備え付けの折り畳み椅子を広げ、そこに坐ろうとしたが、金助が手で制して、

「他人様に、そんなことをして貰うわけにはまいりません」

「親父さん、金之助ですが」

「オヤジサンとは、だれのことでしょうか。

キンノスケとは、俳優のキンノスケさんですか」

「おおおおお」

金之助は悔恨と怨恨の声を挙げた。

二〇三〇年、七月二十一日、午後五時。

麻暮正作と玄治は、観音崎の隠れ家で悲劇的な情報を收拾している。

立原正男の異変は郷田狂介から、小林金助の異変は竹田金之助から報告を受け、心配した玄治は山風健一の自宅に連絡して山風の妻から状況を聞いた。

「海底都市で製造しているらしいクスリは、認知症にさせるクスリなんでしょうね」

玄治が何げなくつぶやくと、麻暮は暗い声で、
「そのテのクスリもある、と云う想定にしないと。

荒野のやることに、断定と限定は禁物だよ」

と云った。

「それにしても、一億総認知症と云うのは、荒野らしい荒っぽいやり口ですね」

「ボクたちの使命は、その前に食い止めること。

そして仲間の犠牲をこれ以上増やさないこと」

麻暮は郷田と金之助に対して充分注意するよう伝え、麗子に対して此処を動かさないよう説得した。

荒野のターゲットはそれが総てと考えていた麻暮は、『巨人荒野』に眼を通していたものの) 陽羅義光のことまでは思い浮かばなかった。

二〇三〇年、七月二十一日、午後五時。

荒野大三郎は東北新幹線に乗って、福島に向かっている。

陽羅義光の住むあばら小屋が、福島原発の近くにあるという情報が、お抱えの情報屋から入ったのだ。

「発狂でもしたのか、放射能汚染も怖れずに、どうしてそんなところにいるのか」

と情報屋は云ったが、荒野には理解できた。

自分にもそういうM的要素があるからだが、その後の台詞には少々戸惑った。

「とにかく容姿もひどいが性格もひどい。

偏屈で変態の権化。

赤貧洗うがごとしと云うが、洗う衣服もない。

何よりも極端な女嫌いで、女性には決して会ってけません」

荒野は男装をして行こうかとも考えたが、会わなくとも問題はない、忍び込んでペン当てればいだけだと思い直した。

(これが済めば、あと五人)

荒野は頭のなかで、順番を決めていた。

美村麗子は、容易い。

郷田狂介も、容易い。

竹田金之助は、厄介だが何とかなる。

玄治も、厄介だが何とかなる。

問題は、麻暮正作だ。

もしかすると麻暮には、このクスリが効かないかもしれない。

そう思うと、荒野は何となく憂鬱になってきた。

いままでその表情を待っていたのか、隣席の中年男が男臭い息を吹きかけて来た。

「お嬢さん、モデル、それとも、女優かな」

「いえ、ただの学生です」
「そうかなあ、そうかなあ、そうは見えないなあ」
男は顔をさらに近づけて来た。
荒野はいたずらっぽく微笑を浮かべて、
「なら本当のことを云いますね。
高級コールガールです」
「そうだろう、そうだろう、納得、納得。
それで、いくら、いくら。
俺は社長だから、百万くらいはいつでも用意できるよ」
男は荒野の膝に手を置いた。
その手に荒野はペンを微かに当てた。
途端に男は鼻をかきはじめた。

二〇三〇年、七月二十一日、午後六時。

竹田金之助は、観音崎の隠れ家に戻っている。
金之助から詳細を聞いた玄治が、
「四人目のターゲットはだれなのか」
とつぶやいた。
金之助は腕を組んで、
「此処は凡そ知られているでしょうが、四人一緒にいれば荒野も手を出せないでしょう。」
心配なのは郷田さんですね。
すぐに郷田さんを、此処に呼んだほうがいいんじゃないでしょうか」
玄治も腕を組んで、
「しかし郷田さんは、云わば荒野の命の恩人でしょう。
そういう人に危害を与えるでしょうか」
すると麻暮が声を発する。
「昨日の友は、今日の敵。
ケケッ。
これが荒野の発想ですよ。
ボクたちの常識は通用しない。
通用すれば、ボクもこれほど苦労はしないで、もうとっくに荒野を抹殺できていたでしょう」
その言葉が終わると、金之助は郷田にメールを送った。

【すでに仲間三名に犠牲者が出ています／さすがの郷田さんでも危ない／こちら

へやって来ませんか】

郷田からはすぐに返信が来た。

【せっかくでありがたいけどさあ／あたしだってあれこれ心労で頭がパンクしそう／認知症にしてくれるならとっととやってもらいたいくらいよ】

金之助はそのメールを麻暮と玄治に見せた。

麻暮は苦笑して、

「ケケケ。

郷田さんらしいねん。

まあ、認知症にするクスリを作ったのなら、認知症をなおすクスリも作ったはず。それを何とかゲットしたいもんだねえ。

敵が外堀を埋めるなら、ボクらも外堀を埋めたいものよ」

「つまり、荒野が動いている隙に、川上と木下をゲットする」

玄治が拳を振り上げると、

「明日からゲット作戦開始しましょう」

金之助も力強く云った。

「しかも未明だよ。

朝になったら猟師が動き、昼になったら海水浴客が動く。

やるならそれまでの時間

素人さんに迷惑をかけてはいけない」

麻暮が穏やかな声で云うと、金之助は真剣な眼をして、

「自分があちこちの米軍基地に忍び込んで、武器を盗んだのは、この時のためだったと解りましたよ。

素人さんに迷惑をかけないためには、小型特製手榴弾ですかね」

「そんなもの運んで来たの」

玄治の問いに、金之助は指さして、

「縁の下に押し込んであります」

「ええっ、誤爆しないかな」

「大平洋戦争じゃあるまいし、最新のやつはそんなことありませんよ」

お兼ばあさんと麗子が、焼酎と肴を運んで来た。

金目鯛の煮付け、烏賊そうめん、生鮫の刺身、海藻の蟹味噌和え、シラス汁。

「うひょう。

美村さんご立派」

金之助が誉めると、麗子は赤面して、

「お兼さんのお手伝いをしただけなの。

でも嫁入り修行にはなるわね」

麻暮は手を叩き、
「ケケッ。
晴れの日が来たら、ボクに仲人させて頂戴ね」
麗子は、もっと顔を赤くして、
「仲人だなんて。
わたしの相手は麻暮さんかもしれないのに」
と冗談を云ったつもりだったが、金之助にも玄治にも冗談には聞こえなかった。

二〇三〇年、七月二十一日、午後七時。

荒野大三郎は、陽羅義光のあばら家の前に立っている。
このところ陽は長くなってはいたが、すでに黄昏は終わり、闇があばら家を不気味に包み始めた。

あばら家の周囲一キロ四方は、半分以上が枯れた雑草、雑草、雑草ばかり。
灯りが皓々と点いているので、荒野は外から一応声をかけてみた。

と、予想に反して中から大声がする。

「荒野大三郎だな。

そんな暗いところに立っていないで入れ」

おもむろに歩を進め、開いている玄関を潜って、土間に入ると、

「わしが陽羅だ」

中は一部屋しかなく、擦り切れた畳に声の主があぐらをかいていた。

小机に、二十世紀のものと思われる旧式のパソコン。

広辞苑と数冊の分厚い歴史関連本が積み重ねられ、その上に煙草（銘柄は後に）と灰皿と焼酎（銘柄は後に）瓶と茶碗。

「待っていたぞ、荒野」

荒野は腰を屈めたまま、近くまで行って坐った。

陽羅の姿は、言語を絶するものであった。

顔は、仮面を取った麻暮や荒野よりも醜く爛れ、〈白髪三千丈〉はシミだらけのタオルで縛られている。

手足はぬかるみを這って来たふうに汚れ、蚊や蚤や百足に食われた部分は赤かった。

小柄すぎる振れた身体は、襤褸雑巾と見紛う布切れで包まれている。

（己自身も含めて）荒野は、これほど見窄らしく汚く醜い人間をいままで見たことがなかった。

「どうしてわたしが来ることを」

荒野はようやく口を開いた。

「知らいでか。

ノンフィクションであれ、フィクションであれ、荒野大三郎はわしが創った人物ではないか」

「意味が解りませんが」

「解るにはあと百年かかる」

「たしか女嫌いと聞いていましたが」

「ガセネタと思わなかったのか」

「具体例がいくつか」

「たしかに女の脳味噌は大嫌いだが、女の躰は大好きだぞ。

いまの荒野は女の躰で、脳味噌は男だから、わしの大好物よ」

「と云うことは、もしかして」

「荒野の魂胆が通用すると思うてか。

莫迦め。

認知症のわしに、そんなクスリは不要」

認知症とは思われなくとも、これはクスリが効く相手ではなさそうだと、荒野はペンを仕舞って、

「先生、先生はどうしてこんなところに」

「先生はやめろ。

先生と呼ばれて脂下がついているのは、麻暮正作くらいなものだ」

「麻暮さんをごぞんじですか」

「知らいでか。

麻暮正作もわしが創った人物ではないか」

「意味が解りませんが」

「解るにはあと百年かかる」

「百年も待てませんから、わたしはこれで失礼します」

戸惑うことばかりの荒野は、来たことを後悔し始めた。

こんな老いぼれた気狂い作家は、邪魔者には成り得ないと感知したからだ。

「待て。

わざわざ来たのだから、伽をせい」

荒野は面喰らったが、蝶子になったつもりで、

「わたしはまだ処女です。

それに先生、いや陽羅さんはインポだと聞いていますが」

「阿房か。

伽は同衾の意味だけではない。

要するに、つれづれなる今宵の話し相手をせいと云うことよ」

「解りました」

と荒野は当面素直に応じたが、陽羅は無名の売れない作家なのに、しかも見窄らしく汚く醜い人物なのに、どうしてこうも威張っているのか不思議だった。

陽羅は茶碗の焼酎を一気に飲み、勢いよく煙草を喫った。

書物の頁の間に葉代わりに挟まっている、するめに似たつまみを、荒野の目の前に突き出し、

「コバラが空いただろ、食わんか」

「美味しそうですが、何ですか」

「庭をうろつく、放射性物質まみれの蝦蟇よ。

つぶして、焚火で焼いたもので、滋養満点だぜ」

荒野は吐きそうになって、

「わたしは遠慮します」

「何だと。

蝦蟇より青大将がよければ、ストックがあるぞ」

「ストックではなく、ストップでよろしく」

「ストイックなやつじゃのう。

酒も飲まんのか」

「すこしくらいなら」

陽羅は自分の茶碗を荒野に渡して、そこに焼酎を注いだ。

「安い焼酎のなかでも一番安い、〈黒ダルマ〉だ。

凡百の作家は、焼酎を焼酎と書く。

焼酎は、芋と麦の違いくらいは書かなきゃあかん。

ビールをビールと書く奴は、犯百よ。

だいたい生と瓶とは違いすぎるし、キリンとカバとサイの同じところは、動物園にいてってことだけさ。

もっとひどいのは、ウイスキーを酒と書く奴よ。

ブランデーの赤と黒は似ているが、焼酎の〈黒ダルマ〉は、〈赤ダルマ〉とは、まったく違う。

味が違うのではなく、飲む奴の嗜好や思考や志向が、まったく違うのさ。

煙草もわしは、〈キャッチャー・イン・ザ・ライ〉を吸っておるが、〈イン・レイト・スタイル〉を吸っておる奴の気が知れぬ」

「何の比喻でしょうか」

その問いには応えず、

「今夜は此処で泊まるとよい。

こんないい女が夜中にうろつくと、襲われるのが必定。

まともな庶民は寄り付けず、居るのは無頼漢ばかりよ。

わしの処にやって来るのも、変人しかおらん」

発作的に陽羅に問いたくなかった荒野は、つと口にする。

「わたしは変人でしょうか」

「世間とやらにわしは、偏屈で変態の権化と云われておる。

つまり世間の常識から云えば、荒野は変人だ」

「わたしと麻暮さんとは、どちらが変人でしょうか」

「荒野は変人的変人、麻暮は常識的変人。
後者の方が狂人であり強靱だ。
「わたしをどう思われていますか」
「好きに決まっておるが、そう云う次元のキャラクターではない」
「麻暮さんとどちらが好きでしょうか」
「只今わし書いているモノの、タイトルを知っておるだろう。
それで解らんやつは愚者だ」
「では、どちらが愚者でしょうか」
「麻暮よ。
荒野を倒せば、世界を救えると思込んでいる。
わしがしぶとく生き続けるなら、荒野も性懲りもなく生き続ける」
「了解しました」
荒野は焼酎の酔いととも、陽羅の言葉に酔いつつあった。
「夜は長い、短いが長い。
くだらん質問はやめて、本質的な話をすべきだな」
「了解しました」
それでも荒野は、まだ了解していたわけではなかった。

壁も戸も障子も破れ放題なので、其処から何げなく外を眺めると、無言の星々がこちらを見ている。
雑草たちの戦ぎも虫たちの喘ぎも微かに聞こえるが、それでも闇に包まれていると云う気分は抜けなかった。「荒野、何を見ている」
陽羅は叱る口調で云った。
荒野はゆくりなく顔を戻し、
「闇を、闇を見ました」
「あれを闇と呼ぶには可愛らしすぎる。
闇と云うのは、荒野の脳味噌の闇のことを云うのだ」
(そうかもしれない)
と思ったが、思うことと口に出ることとは違った。
「私の脳味噌は鮮明です」
げほげほげほと陽羅は不気味に噎せて、口から血を吹き出した。
「莫迦め。
鮮明と云うのは、この鮮血のことだ」
荒野がハンカチを取り出して血を拭き始めると、陽羅はその行為を邪魔するふう
に、擲擲するふう、血溜りの上で踊り出した。
素頓狂な節をつけて、頓珍漢な声で歌いながら。
あるいは、頓珍漢な節をつけて、素頓狂な声で歌いながら。

ホラホラこれがわわしの血じゃ

ゲホゲホゲホと飛びだしたじゃ
ホイ命をけずる血のしぶきじゃ
ボロンボロンと死んでゆくじゃ
あいつもこいつも死にゆくじゃ
ダダダれが例外と云うのかじゃ
この世はぜんぜんかなわんじゃ
あの世にまったくかなわんじゃ
人生いろいろごくつまらんじゃ
ホイでもわしはかまわんのじゃ
ナンでもわしはかまわんのじゃ
つまらんもんはかまわんのじゃ
かまわんものはつまらんのじゃ
拘泥したれど無意味があるじゃ
感染したれど有意義がないじゃ
ケケケケツほどもあるないじゃ
プフイフイちもつあるないじゃ

まだまだ歌も踊りも続きそうだった。
陽羅が自分にメッセージを送っているのだと、荒野は感受した。